

慶応元年中央政局における薩摩藩の動向

——将軍進発と条約勅許を中心に——

町田 明広

はじめに

元治元年（一八六四）の禁門の変において、官軍の主力として長州藩を撃退した薩摩藩は、長州藩への敵罰を当初は志向し、在京要路は長州征討の実現に向けた周旋活動を展開した。しかし、あくまでも長州征伐そのものは実行するとの前提ではあったが、征長後の幕府の矛先が薩摩藩に向かうことへの強い警戒心から、この間に藩論は、つまり島津久光の志向は明確に「抗幕」へと転換した。最も征長に強硬であった西郷吉之助も、自身の越権行為を忌避する久光からの帰藩命令に接し、独断専行的な行為に対する久光による懲戒を恐れたことから、長州藩寛典論に方針転換した。そして、征長総督徳川慶勝の許で参謀格として遇された西郷は、第一次長州征伐においては非開戦による長州藩の温存を図った。^①

西郷は巧みな周旋によって、非開戦による解兵を実現したが、その直前に行った吉川経幹に対する口上は、長州藩を有力な薩摩藩のパートナーとして位置づけるもので、薩摩藩・久光の寛典論・早期解兵の方針は、単に薩摩藩一藩としての抗幕政略に止まらず、将来の盟友たる長州藩の甚大な損害を回避するとの側面もあり、薩長融和に向けた具体的なアプローチの嚆矢であった。この段階で久光が明確な抗幕志向を醸成し、長州藩を有力なパートナーと位置づけた西国諸藩連携への明確なビジョンを形成したことは、慶応期の歴史的事象に多大な影響を与えた。

一方で、幕府は第一次長州征伐の成果を過大に評価し、参勤交代・諸侯妻子在府の復古政策や藩主毛利敬親・広封父子および五卿の東行という強硬姿勢を打ち出して、朝廷や西国雄藩との軋轢を強める。その打開策として、幕府は長州再征のための将軍家茂の進発を実現したものの、長州藩は従幕・

恭順から抗幕・武備に藩論を転換して対決姿勢を強めており、大坂に長期滞陣を強いられた。実は戦わずして長州藩が軍門に下ることを想定し、武力発動には当初から消極的であった幕府は、長州再征の勅許を得ることで、膠着した事態の打開を企図した。また、軌を一にして、通商条約の勅許などを求めて英国を中心とする四国艦隊が摂海に闖入したことから、中央政局の混乱は拍車がかかり、將軍の辞職問題という前代未聞の珍事まで惹起するに至った。

この間、中央政局において常に幕府と対峙したのは、抗幕志向に転換し長州藩との融和に積極的な薩摩藩であった。三月二日御沙汰書の交付、長州再征および通商条約の勅許を巡り、薩摩藩は幕府と朝廷工作において激突を繰り返したが、先行研究においては、これらの事象の幕府側からの詳細な分析は見られるものの、薩摩藩側からの考察が不十分である。また、藩論を軍事改革・武備充実によって富国強兵を図り、幕府から距離を置いて将来の戦闘に備えるという抗幕志向に転換した薩摩藩の藩政改革について、ほとんど論及がなされていない。そして、この間の薩摩藩の意思を決定した久光および藩政を牽引した小松帯刀の動向を軽視している嫌いがあり、十分に論じられているとは言い難い。

本稿では、これらの諸問題について可能な限り考察を加え、慶応元年中央政局における複雑な政治的事象の究明を通

じて、この時期に薩摩藩に醸成・確立され、その後の藩是を規定した抗幕志向の実態を明らかにする。そして、薩摩藩が長州藩を有力なパートナーと位置づけ、西国雄藩による諸侯会議実現への明確なビジョンを描きつつ、廃幕運動に邁進し始めた動向を説明することを目的とする。

1 幕府の復古政策と三月二日御沙汰書

1・1 参勤交代復旧等に対する薩摩藩の対応

元治元年（一八六四）に発生した政治的な重要課題として、九月一日に幕府から布告された参勤交代およびそれに伴う諸侯妻子在府の復旧政策³があった。そもそも、文久二年（一八六二）閏八月、政治総裁職松平春嶽の主導の下、文久改革の一環として、三年に一回の出府に緩和し、妻子の江戸居住制度を廃止していた。諸侯の経済的負担を軽減し、国許の武備充実を図り、挙国一致して外国に対峙することを企図した政策であった。

参勤交代・諸侯妻子在府の復旧は江戸在の閣老が主導したもので、その背景には禁門の変に対する過大評価があったことは否めない。禁門の変によって朝敵とされた長州藩は將軍進発を喧伝すれば、戦わずして屈服するとの目論見が働いたことは容易に想像できよう。その復古主義的な志向は、これ

ら制度の復旧に止まらず、文久三年八月（一八六三）に率兵上京して朝議を受けていた老中各小笠原長行の宥免を朝廷に求めるに至った。この機を捉えて幕威の再浮上を企図したもので、中央政局の実相や西国諸藩の思惑を全く認識していない愚弄な政策転換であった。このタイミングで將軍家進発がなされなかったことが、西国諸侯の幕府離れを加速し、一会桑勢力との関係も円滑さを失ってしまった。

第一次長州征伐において、幕閣は長州藩が干戈を用いず服罪した態度から過信し、元治二年（一八六五、慶應元年）に四月七日改元）一月十五日、老中水野忠精は長州藩に対する今後の対応は江戸において行い、將軍家の進発も取り止めることを布達した。更に二五日の老中達においては、「今度参勤交代之儀、前々之通被仰出候ニ付テハ、当年参勤年ノ面々ハ、前々参勤ノ期限遅々不致候様、参府可被致候、且長防追討之面々モ帰邑ノ上ハ、四月・六月前々割合之通参勤可被致候、右之趣万石以上之面々へ、早々可被相違候事」と、前年九月の復旧令の厳守を諸大名に命じた。更に、二月一日に姫路藩主酒井忠績を大老とし、幕府体制内の強化に努めた。

参勤交代・諸侯妻子在府の復旧は、その意向が伝わるや否や、朝廷や一会桑勢力および西国諸侯は、極めて大きな抵抗感を露わにしており、薩摩藩においても同様であった。長州征伐後の幕府の予先が薩摩藩に向かうことへの警戒心から、

島津久光は藩地に割拠して、貿易の振興や軍事改革・武備充実による富国強兵を目指し始めており、幕府から距離を置いて将来の戦闘に備えるという抗幕志向を明確にしていた。その一環として、参勤交代・諸侯妻子在府の復旧は何としても阻止しなければならない事象であった。

元治元年二月二〇日、西郷吉之助が岩国に到着して吉川経幹に謁見し、薩摩藩を代表して口上を述べている。該口上について、長州藩側の記録にないことから、西郷が実際に経幹に語っているかどうかは不明である。しかし、薩摩藩が用意していたことは間違いなく、その内容は薩摩藩・久光の意向を反映したものであり、藩是と言える重要なものである。その中の一節で参勤交代・諸侯妻子在府の復旧に言及しており、以下その内容を確認したい。

扱只今幕府之卒暴絶言語候次第、第一天朝ヲ蔑ニシ、益交易ヲ専ラトシ、且一端諸大名参勤ヲ免シ、御台所ヲ国々へ退去成サシメ候処、又已前之通り人質可差出候様被申触候由、今更中々々様之儀決シテ出来間敷相考へ申候故、芸州・備前等中国・関西之諸大名令一致、向後ハ何事モ申合万事相計可申段令決着候、此上ハ早速諸国へ参上致シ、取約申積ニ御座候間、何卒長州公へモ御周旋申上、此掛合へ御加り被成度奉存候
これによると、今の幕府の突然な手荒いやり方は言語に絶

えず、第一には朝廷を蔑にし、益々貿易に専心している。しかも、一旦は参勤交代を緩和して妻子を国許に戻すことを許可したにもかかわらず、以前の通りに人質の差出を沙汰したが、今更そのようなことが可能とは思えない。芸州・岡山藩などの中国・関西の諸大名を連合させ、今後は何事も申し合わせの上、万事取り計らうことに決着させるつもりである。この上は早速諸藩に参上して連合の取り決めを行うつもりなので、何卒長州藩主にも周旋してこの連合に加わってもらえるようにしたいとする。参勤交代の復活などの幕府の政事を指揮して、西国諸藩連合を提唱し、長州藩をその主要メンバーとして依頼している。

また、元治二年一月二五日付の久光書簡草稿（老中水野忠精宛）においては、「何分非常之世体目前之小康ニ安んし、遠大之策略ニ暗く候而は不可然義坎と奉存、愚昧之管見ノ別而恐入候得共、御国威之廢興ニ致関係重大之事件、天下之御為傍觀沈黙いたし候時ニ無之と存詰不憚忌諱、別封伺書差上申候」と、参勤交代復活の批判を口上する意見書を奉呈する準備をしていた。その中で、薩摩藩は「戊年以來官武之御為東西ニ奔走仕、且一昨年英夷襲来、今般征長出軍等、旁以莫大之入費打統、殊ニ弊藩は三面之海岸ニ御座候得は、砲台其他防海之要器未不行届ニ而、偶非常之御英断を以被仰渡候武備充実之千之一ニも難至、別而心配仕罷在候」と、この間の

国事周旋、薩英戦争や長州征伐において莫大な出費が続いており、海防など武備充実に全く至っておらず、その上、参勤交代の復活は財政的に大打撃であると、暗に取り下げを求め

る。また、諸藩においても、「一同国力疲弊武備廢弛藩屏之任難相整、然時は外夷は弥輕蔑驕慢之心を増し、乍恐御国威遂ニ地ニ墮ち可申は必然之勢ニ御座候」と、参勤交代による疲弊は武備の廢弛を招き、そうなれば外国から侮りや高慢な態度を示され、国威は地に落ちてしまふと嘆じる。そして、「非常之時世、御旧格ニ御拘泥被遊、只御府内而已之繁盛を以、万全之御良策と被思召、物価日ニ騰貴、諸国は月ニ衰弊仕、且摂海之要港は未盛大ニ御手不相付候而は、乍恐尊王之御欠典とも可奉申上坎、別而奉恐入候次第ニ而長大息無限儀ニ奉存候」と、幕府の私政を厳しく非難し、摂海防備の不備を指摘して、参勤交代の復活を批判した。

長州藩処分については、元治二年一月五日、幕府は征長総督の徳川慶勝に対し、大目付大久保忠宣・目付山口直毅をして本郷駅（安芸国豊田郡）において、毛利父子・五卿を江戸に送致し、後命あるまでは解兵不可を命じた。慶勝はその台命を奉ぜず、そのまま解兵後の帰藩の歩を緩めなかった。二月五日、幕府は重ねて慶勝に毛利父子・五卿の江戸送致のため、警備兵を大坂に留め、大目付駒井朝温・目付御手洗幹一

郎の指揮に従うこと、かつ速に出府すべきことを命じ、二六日には大目付塚原昌義（駒井解任後の後任）の長州藩派遣を知らせ、重ねて前命を徹底した。

これに対し、慶勝は幕府に上書して、二月二一日に毛利父子・五卿の江戸送致の不可を、更に二八日には暫時猶予すべき旨を進言し、三月六日に駒井・御手洗に対して、江戸送致の再議を求め、出府を拒否する旨を言上した。一方で、二月一日に福岡・久留米・佐賀・肥後・薩摩の五藩に五卿の分置を沙汰し、二二日には五藩の京都留守居を招き、それに關して五藩で協議し、時宜の処置を講ずることを命じており、台命と齟齬を来す発令を繰り返した。

一方で、朝命により一月二四日に入京した慶勝は、朝廷に對して諸藩主の上京を命じる内勅を下し、その衆議によつて長州藩処分の方針を定めることを奏請した。ここで問題となるのは、慶勝の企図する諸侯會議が將軍家の上洛を前提としていたか否かについてであろう。一月二八日、慶喜は尾張藩本陣を訪ね慶勝と面談した際、慶勝の「此際賢明の大諸侯六七藩を京師に招集し、其意見を聞取り、然る上決定せらるゝ方なるへし」との提案に對し、「そハ誠に御同意なり」と回答した。このやり取りについて、先行研究を代表する久住真也は、「幕府を自らの拠つて立つ基盤としている一橋が、將軍・幕府への大政委任を根本から否定するような考えに賛同

するはずがない」と、慶喜の同意を最大の根拠として、慶勝の意向が將軍家上洛を前提としているとするが、果たしてそうであろうか。

慶勝が上京し、知恩院に入ったのが一月二四日であるが、同日、肥後藩京都留守役の上田久兵衛が「類ニ愚論を呈」する慶喜家臣の川村恵十郎に對し、「会津公之東下を留メ、列藩召を難」じた。これに對して、川村は「親藩其人なし」と応戦したが、「たとひ其人なしとも、其人の有過るには勝るへし」と切り返され、「大ニ感悟」している。更に、川村が「然時ハ名を指して朝より召ハ如何」と諸侯召命にこだわったが、上田から「召ニ漏て甘心せんや、恐らくハ余症ニ変せん」と返され、「語塞ル」というやり取りがあった。ここから言えることは、慶勝が入京する以前から慶喜は諸侯會議の意向を持つており、上田がその事実を知っていることから、ある程度は慶喜の諸侯會議支持の動靜が喧伝されていたと推察される。しかも、支持の事由として、川村が老中批判を行つていることから、將軍家の上洛を前提としているとは考え難い。

また、後述する通り、松平容保が自ら東下することによつて、將軍家の上洛を画策するとし、諸侯招集に待つたをかけるため、慶勝と慶喜に申し入れを行つたが、慶勝は「諸侯を招集云々申し、ハ、長防の処分に関する意見を聞取るへしと

の主意にて、百般の政務を議せしむるにあらず」と回答している。これは大政委任とは切り離して、明らかに將軍家の上洛を前提にしない諸侯による事実上の長州藩処分協議を想定していたことを意味する。慶勝の動向は、將軍家の進発が実現しない中で、全権委任された慶勝の処置を否定する幕閣に対する抵抗であり、何より、將軍家の進発が絶望的な状況下において、衆議方式は早急な長州処分決定の有効な方策であった。また、慶喜が諸侯会議を志向した背景については、後述する幕閣の猜疑心を忌避しての同意ではあるが、將軍家の進発は実現せず、一方で諸侯会議が実現した場合、自らが諸藩連合のホスト役として衆議をまとめる立場になることを想定していたと考える。

また、慶勝・慶喜の諸侯会議の方向性は、薩摩藩の政略を反映したものであつて、極めて重要な事象である。薩摩藩は抗募志向を明確にするとともに、その戦略として西国諸藩連合を提唱していたが、その具体的方策と史料できよう。朝威を背景にした衆議という大義名分の下、西国諸藩連合を結成し、幕府に対峙して国政への容喙を図る企図がこの段階で確立している。長州処分案が衆議、すなわち事実上は西国諸藩を中心とする諸藩連合の合議によって決定し、それが朝廷から幕府に沙汰されることによって、將軍家は大いに恥をかかされた上に大政委任は事実上、反故にされる。抗募戦略の要

である朝廷權威の向上、幕府權威の失墜を一気に図る薩摩藩の戦略であった。

慶勝については、西郷吉之助の意向が反映されたことは疑いないが、慶喜については、小松帶刀の入説が大きく寄与したであろう。その前提として、当時慶喜が中央政局で置かれていた極めて困難な政治的立場を確認したい。元治元年一月一日に老中松前崇広、二二日に若年寄立花種恭が相次いで率兵上京した。その目的は、表向きは長州征伐の軍令を達すること、内実は慶喜を東下させることであつたが、朝廷の了解は得られなかった。江戸では、「一橋公水人江御一味相成、今通に而は不相済候間、橋公に迫候賦之由」と、慶喜が西上する天狗党と合体すると喧伝されていた。

慶喜もこのことは十分に承知しており、天狗党鎮圧軍の指揮を執るため大津に向け進発するにあたり、「留守中万々一諸藩分申立候趣も有之御疑有之候而ハ、天下ハ是限之儀ニ御座候、関東分類ニ嫌疑相掛色々無筋之儀も御座候付能々御明察不被下候而ハ、決而此後之処瓦解罷成可申旨只々被仰置候」と幕府や諸藩の動向や自身への嫌疑に心痛している。また、「常野脱走人と同意など之風評以外なる儀二而、是迄正義之御名も是限且後世正史を御機之儀看二可被為成儀候而も無之、専関東分之策言色々曲を唱御帰府之策取斗可申哉」と、今回の天狗党との合体の流言は江戸に引き戻すための幕

閣の策謀としている。

こうした中で、小松は慶喜に接近し、江戸幕閣との離反を画策した。抗幕志向を明確にした薩摩藩にとつて、幕府本体と対峙するために担ぎ上げる存在として、慶喜以上の適任者はいなかった。薩摩藩は朝政参与（参与会議）等で慶喜に煮え湯を飲まされ続けたが、完全に排除できない事由がここにあった。小松書簡（大久保一藏宛、一月二六日）¹⁶によると、先日慶喜を訪ね、「当時関東之形勢旁思召相伺度申上候処、至極御配慮之御模様ニ御坐候、如何御所置相成候哉」と尋ねたところ、「何分手前忤誠ニ不都合之由、しかし只今之役人ニ而は逆も不相済板倉ニ而も差出候而は如何と折角相考居候」と、自身への嫌疑と板倉勝静の登用の希望を述べた。

よつて、小松は「先只今之形勢ニ而は究而橋公、会津、桑名辺之処京師曳取候様幕命可相発、左候へは朝廷よりハ決而御差留ニ可相成その時は則混乱も差見得其上ハ弥幕威ヲ張り以前之通朝廷ヲ輕蔑し候者案中御坐候」と、現在の形勢では一会桑勢力をすべて江戸に引き戻す幕命が出ることは間違いない、そうなれば朝廷より差し止めの朝命があり、中央政局の混乱は必須となる。その結果、いよいよ幕府は以前のように朝廷を蔑視することは想像に難くないと断言する。

加えて、「順を以申さは只今之内閣老辺御切替之処、第一無左は諸候ヲ御頼橋公之御手限ニ而朝命ヲ御奉シ天下之大政

被相替坎両条之外ニ見込も無御坐候間、今成ニ而被召置候得は徒ニ光陰ヲ被過海軍も防禦も不調如何して皇国之御為ニ相成筋合御坐候哉」と、閣老の交代を第一としながらも、実現が叶わない場合は、慶喜を中心とした諸侯連合を形成し、慶喜自らが勅命を奉戴して幕府に代わつて大政委任されるべきであると極言する。そして、この状態を徒に放置すれば、海軍や防備も整わず、皇国のためにならないと慶喜に迫った。慶喜は「成程尤ニ候間、いつれとふとか不相成候而は不相済候間勘考ヲ付候」と明言は避けているが、小松をして薩摩藩の方針がストリートに慶喜に伝えられている。

なお、吉井友実是小倉より大久保に書簡を發し、「在陣之諸家人心又一変いたし候、必一橋公之手と幕府両立可致、もふこそ持重之策ニ極り可申坎」¹⁷と、征長軍の雰囲気反幕府に一変しており、必ず幕府本体と慶喜の離反は可能であり、この策で推し進めるべきであるとしている。薩摩藩にとつて、抗幕運動の旗手として慶喜を利用しようとしていたことがここでも確認できよう。

ところで、上田久兵衛書簡（父宛、元治元年二月一日）¹⁸によると、二月一日に上田は朝彦親王を訪ねて時事を断じたが、親王から「自然一橋浮浪と一味いたし候ハ、如何可仕哉」と、慶喜が西上する天狗党と合体した場合どのようなことになるかを諮問された。上田は「朝廷之御所置さ

え至当ニ出候得は、一橋様とても列藩ニて打取可申、少も御懸念有之間敷、只々根本之処ニ御尽力御坐候様」と慶喜追討も辞さない覚悟を示し、朝廷の動揺がないように逐一回答した。それに対し、朝彦親王は「至極御同意、兎角頼申候故、関白ニも右様之説追々申聞呉候様との御沙汰ニて」、上田は関白二条斉敬にその内容を伝えている。この事実から、朝彦親王や二条関白の慶喜に対する信頼が必ずしも醸成されていないことが確認でき、慶喜の中央政局における地位は通説と違って、脆弱であったと考えられ、薩摩藩・小松帯刀の入説を受け入れる素地があった。

一方で京都守護職松平容保は將軍家が進発を中止し、諸侯が上京して長州藩対応を衆議することを憂慮し、諸侯への内勅降下を阻止するため、朝彦親王や二条関白に藩士をして入説させるとともに、自ら江戸に赴いて將軍家の上洛を周旋するための猶予を願ひ出た。例えば一月二四日、朝彦親王に対して広沢富次郎を遣わし、「蒙御内勅下向イタシ度由、右ハ幕之カンリ共退ケ尊奉ヲ為致且天下人民安ランニ有度旨、実ニ是而ハ不相済義、自分ハ守護職ナカラ徳川氏之タラレ候ヲ傍觀モ難仕、且尾老より諸侯以御内勅被召候様内願之旨、左様相成候而ハ天下之大乱ト可相成、今一応勘言モ致度旨決心ノ由¹⁹⁾」と懇請している。朝廷は一端これを聴許したものの、後述する老中本莊宗秀・阿部正外²⁰⁾の率兵上京を機にこれを延

期させた。

松平容保の江戸下向の延期について、最も効果があったのは、上田久兵衛による周旋であった。朝彦親王や二条関白などの朝廷要路に粘り強く反対を唱えており、それが功を奏したと言える。ところで、慶喜の諸侯会議構想に対して、容保は強く反対の態度を示しており、両者間に擦り合わせをする経緯も見出せないことから、一会桑勢力について、この時点ではとても盤石なものとは言い難い実態が確認できよう。

このような情勢下において、久光は大久保一蔵を京都に派遣し、毛利父子・五卿の東行および参勤交代・諸侯妻子在府の復旧阻止、長州藩処分²¹⁾の衆議による決定を画策した。一月二六日、大久保は吉井・税所篤を伴ひ出発し、もう一つの目的である五卿滞在の改善を福岡・久留米両藩に申し入れた後、その後の周旋を託した吉井を残して京都に向かった。二月七日に入京した大久保は、早速小松と今回の藩命について意見を交わし、当面は久光の意向が最も強い参勤交代・諸侯妻子在府の復旧阻止に向けて廷臣に入説することになった。

よって、小松・大久保は九日に朝彦親王²²⁾、一日に近衛忠熙・忠房父子、一二日に二条関白に拝謁し、参勤交代・諸侯妻子在府の復旧は撤回すべきことを朝廷から幕府に沙汰するとの同意を得た。小松・大久保の周旋はあっけなく成就したが、本件は一会桑勢力を始め、肥後藩など西国雄藩も復旧策

は不支持であり、このような背景があったことも薩摩藩には有利に働いたことは自明である。むしろ問題は、それをどのタイミングでどのように幕府に伝えるかにあった。

1・2 三月二日御沙汰書を巡る中央政局

薩摩藩の周旋と軌を一にして、老中本荘宗秀および阿部正外が計三千もの幕兵を率いて、二月五日・七日に相次いで上京した。その目的は、慶喜の東帰を図り、京都守護職・所司代を罷免すること、諸藩の勢力を京都から駆逐して幕府が制圧すること、將軍家の上洛取り止めの伝達にあった。この件について、山階宮晃親王は久光に対して、「五卿・長州父子東行之台命ハ、尾老公嚙々迷惑ト察入候、其他此節之形勢大息之々々も候得共、筆紙ニ難尽候、定而在京御家臣より一々申入事ト存候」と、中央政局の逼迫した政情を嘆いた。

また、「大久保一蔵・帶刀同道ニ而入来委曲承候、御尤く存候、殿下・尹宮江御申入之よし、則於宮中殿下御咄も承り候、近日老中参朝之節被仰下候由ニ候」と、薩摩藩による周旋が成功し、両老中の参内の際に参勤交代・諸侯妻子在府の復旧のみならず、毛利父子・五卿の東行の不可が申し渡されるとの見込みを示した。しかし、「此節之形勢ニ而は、奉勅候哉、如何、其辺は甚心痛候、万々御深考ト存候」と奉勅の可能性が低いのではと心痛しており、「何分く大樹公

は正義ニ被為渡候へ共、心得違之執政得ト、天保以前之風俗ニ打返し度候本心之よし、此一事より万事々々と成行、扱々悲歎之事ニ候」と嘆じていた。

しかし、二二日に両老中が参内したところ、二条関白によつて慶喜・慶勝の東帰、將軍家の未進発等につき詰問・叱責を受け、本荘は摂海防御のため下坂、阿部は將軍家の早期上京を周旋するため東帰を、それぞれ申し渡された。ここに所期の目的は悉く失敗に帰した。なお、その際に参勤交代・諸侯妻子在府の復旧および毛利父子・五卿の東行についても、その不可なることが関白から達せられたが、口頭のみであった。

この間の事情について、久光は晃親王に書簡を発し、以下のように状況を慷慨し、朝廷による参勤交代・諸侯妻子在府の復旧および毛利父子・五卿の東行の阻止を期待した。

然は常野浪士一条、鎮靜相成申通御安堵之義と奉存候、併田沼苛刻之所置、歎息之次第ニ御座候、五卿・長父子等東行之幕命、時勢ニ暗キ所置坎と奉存候、且両閣老多兵引率登京仕候処、何等之義も不申上、一老は婦東、一老は下坂仕候由不可解之義、併君臣之名分地を扨ひ候次第言語道断之義、歎息無限奉存候、扱大久保一蔵差上、愚意殿下御初へ内分申上候処、御聞濟被下、別而雖有奉存候、乍恐是非朝威を以御差止不相成候而は、此末暴令

を行ひ、終二御国威も消滅仕候義と心痛仕罷居候、不遠御吉左右承知仕度奉待上候

これによると、鎮圧された天狗党への幕府の過酷な処置を嘆じ、毛利父子・五卿の東行の幕命を時勢に暗い処置として非難する。かつ両老中の率兵上京の結果を不可解として、幕府の朝廷への対応を言語道断として切り捨てている。一方で、大久保を上京させ、久光の意向を二条閑白などに述べて了解を得たとし、朝威をもつて参勤交代・諸侯妻子在府の復旧および毛利父子・五卿の東行を阻止しないと、幕府の暴政によって国威も消滅してしまうとして、朝廷の奮起を促した。薩摩藩在京の要路はこのような久光の意向も相俟つて、明確なる朝廷からの沙汰を期待した。

二四日、小松・大久保は二条閑白を訪ね、その詳細を聞き及び、ここまで尽力してきた参勤交代・諸侯妻子在府の復旧が曖昧のままになることを恐れ、今後の方針を問い質した。それに対し、二条は「大樹上洛之上、御評義可被為在之御事候由御答」であつたため、大久保が「両条ハ、上洛ヲ待候而は、既ニ幕命相成居候訳ニ而ハ諸藩内情込入候訳云々候間、是非表通御沙汰相成候様奉願」と迫つたため、「尤之事ニ而早速御評義可被遊」と速やかに朝議で諮るとの言質を取った。更に、近々に「御沙汰書ニ而御達相成候様、屹と御尽力可被下」と、御沙汰書によって幕府に示す確約を二条閑

白から引き出した。

翌二五日の朝議において、「参勤コウタイ妻子等新例之通不復旧例二様之事、防長之所置当分ノ見込可有言上候事、右両條サツ分申出候也」として、議論されたが結論に至らなかった。ここでは、長州藩の処置も議論されており、薩摩藩としては当初は参勤交代・諸侯妻子在府の復旧に絞つた周旋をしていたが、この段階では毛利父子・五卿の東行阻止についても、併せて懇請していることが確認できる。六条有容や上田久兵衛は朝彦親王と相談し、その不可を画策した結果、二七日の朝議において否決に持ち込んだが、ここから小松・大久保による巻き返しが始まり、その日のうちに「小松帯刀大久保市藏令面会畢、内願之義押而申出候事」と朝議の変更を迫つた。

翌二八日、朝彦親王は小松・大久保を呼び、「過日内願之次第昨日御評議之處、事両端ニ出如何故阿部豊後守令一応何トケ申来候迄可相見合御治定之事、此旨相達候處、段々申立之通是非々々今一応相願旨ニ付其由閑白殿へ可申入旨申置候事」と、内願却下の事由を説明したが納得せず、頻りに請願するため、閑白までその旨申し入れると約束した。二九日、朝彦親王は薩摩藩からの内願等を相談するため二条閑白を訪ねたが、そこに小松・大久保等が後を追つて来たため面会した。小松は「書付一通持参候而ケ存付ニ致シ、明日御評議之

節指出クレ候様頼、仍而先承知之旨ニ而預置畢、直様開白へ見セ置直様帰リ畢」と沙汰書案を持参しており、明日の朝議に諮ることを要求したため、了解して受け取り関白に渡している。

三月一日の朝議において、翌日の御沙汰書交付が確定した。この間の事情について、二条関白は朝彦親王に「彼一紙（御沙汰書）会へ相見及内談候所、只今方会へ返答ニハ兎モ角モ御書取勘不承知之由申越候へ共、愚存ニハ今日御書取不被出候へハ最早説得モ無勘考、尊公下官迷惑而已ニ而押方無御座候ニ付、再応押返申遣候ニハ成丈手輕之書取ニ致し、是非々々被出候事ニ可致候」と語っている。これによると、事前に御沙汰書を会津藩に披見して内談したところ、交付は不承知であったが、交付しなければ薩摩藩は納得せずに迷惑のみなので、薩摩藩作成の原案をなるべく簡易にし、会津藩を再度説得することであった。二条らが小松・大久保の執拗な周旋活動に辟易している様子が窺える。

なお、朝彦親王は「左様可心得様肥後守へ可申入置」と回答し、松平容保への根回しを助言している。これについて、朝彦親王と会津藩士との間には、「広沢富次郎来参勤妻子等之御沙汰書被出候而ハ不宜旨申来仍而関白殿之封中見セ候処持帰り畢、大野英馬未刻スキ来関白殿より見セ被下候通ナラハ先ツ〳〵御沙汰書被出候共宜旨承り早々令伺公畢」とのや

り取りがあり、十分な根回しが行われていた。

さて、御沙汰書の内容については、以下の通りである。

大樹上洛之儀、老中兩人江御沙汰有之候通、外夷之大患長防処置之重典、危急之世体皇国治乱之境、別而被恼宸襟候、将今般毛利大膳父子出府、実美以下呼下之命有之、不穩之勢、此上相当之処置を失ひ變動を醸候而は、内外不可救之勢顕然ニ付暫閣諸大名参勤、妻子出府之儀ニ於而は、昨春褒勅之次第も有之候間、去文久二年之令ニ復シ、猶其末大樹上洛之上結局永世不朽之国是熟評被聞食度候間、何分ニも迅速發途被宸宸襟候様可致、過日老中参内之節、右等之条々委曲可有御沙汰之処、其儀無之、重而被仰出候事²⁵⁾

これによると、薩摩藩が目論んだ参勤交代・諸侯妻子在府の復旧および毛利父子・五卿の東行中止が謳われており、將軍家の上京も強く催促されている。なお、諸侯会議については、「大樹上洛之上結局永世不朽之国是熟評」にその意が込められていると考える。將軍家茂が上洛の上、永世不拔の国是を「熟評」、すなわち衆議の上、確立することが求められた。この時点で、大政委任されている幕府の意向を無視した参勤交代・諸侯妻子在府の復旧および毛利父子・五卿の東行中止の沙汰がなされているが、家茂は衆議の席で改めて本件を承諾することにもなりかねず、その場合、幕府權威の失墜

は覆い難い事実として認識されることになろう。

しかし、その後一會桑勢力による巻き返しが開始された。この間の事情を大久保書簡（蓑田伝兵衛・西郷宛、三月六日²⁶）で確認したい。「然処又々一難到来、会津・所司代ヨリ一橋江談合、少々内評義有之、勅書所司代方江留置、尚一橋ヨリ子細可申上候間、其内右通被問召置被下候様御届相成、大ニカヲ落シ」と、会津・桑名両藩から慶喜に談合があり、御沙汰書を幕府に伝達せず、所司代に留め置くこととなり、薩摩藩が落胆する事態となった。

なお、「二條公能々御請合、其余議奏衆刃ニ至リ、御同論之事候得共、表通ハ向シテ、陰ニ違背之方モ有之」とあることを注視したい。大久保は「違背之方」を明記していないが、史料編纂の段階で、編者である市来四郎は態々「（賀陽宮）」と注書きしている。『朝彦親王日記』を見る限り、そこまでの行為は見出せないものの、元治元年（一八六四）一月から三月にかけての朝政参与体制の崩壊過程で、急速に関係を悪化させた朝彦親王と薩摩藩の關係は修復しておらず、この段階での友好關係は表層的なものであった。

一方で、朝彦親王は薩摩藩への警戒感を強めていることは間違いない。「薩ノ大隅守上京風聞虚実タンサク之事、若左様ナラハ肥後守下向益不宜旨申入ル²⁷」と、久光の上京を極めて忌避しており、そのために容保の在京を求めるほどであっ

た。また、反薩摩藩的な動きをする六条有容や上田久兵衛を重用している事実からも、朝彦親王が薩摩藩と内実は疎遠になっている証左である²⁸。

朝彦親王と薩摩藩の關係悪化が決定的に読み取れるのは、三月二〇日、大久保が帰藩の挨拶に朝彦親王を訪ねた際の言上におけるやり取りである。大久保は「帰国御暇乞ニ来置ミヤケ²⁹」として、「幕威ニ恐れ幕へ内々御教ゆふ如何、戊年以來三郎御同意之所此頃ニ而如何之思召ニ存ル旨、朝政以私論相定且御一人ニ而被決候事如何」と詰問した。これによると、幕威を恐れて内密に朝廷の意向を伝えること、文久二年以降は久光に同意されていたが最近の反する言動のこと、朝議を私論で牛耳りかつ一人で決済することを詰っている。朝彦親王はこれに対して、「右等所不宜存旨仍而風諫いたし候旨申仍而シンセツト挨拶ニ及候事」と否定し、むしろ遠まわしに仄めかしてくれたと感謝している。

しかし、翌二一日に会津藩公用人の小森久太郎を招き寄せ、「昨日市藏分承ルケ條極内々申聞置候事」と至極内密に会津藩に情報を漏らし、慶喜家臣の川村恵十郎に「同断申聞関白殿へ内々申入くれ候様頼事」と、二条関白への内密の伝達を依頼している。この事実から、朝彦親王は薩摩藩から一會桑勢力へ完全に軸足を移行しており、朝議における薩摩藩の協力者は内大臣近衛忠房および議奏正親町三条実愛に限ら

れた。もつとも、薩摩藩との関係が断絶したということではなく、二六日には「サツ大島吉之助長征相済帰京、仍而来令対面口祝遣候事」と西郷と面談している。

また同日、小松を呼び寄せ、「過日大久保市藏申候ヶ條之内、幕威ニ恐れ幕へ教諭イタス之旨此義如何ニ候哉、於予ハ左様之義無之可イカル時ニハイカリ可申存意ト申候所、左様ナラハ至極尤ト申居候事、サツ江予隔意無之旨申候へ共難有旨申居候畢」と、大久保の発言に対する否定の見解を示し、迎合的な態度で小松の了解を求めている。しかし、ここでも川村を呼び、「昨日ノ帯刀之返答フリ委細咄閑白殿へモ極内々可申上様申置」^③いている。朝彦親王の徹底した反薩摩藩的な行動が窺えよう。

さて、御沙汰書の幕府伝達を巡って、小松・大久保は「尚又二條公共外へ奔走仕候」^④と二条閑白を始め要路への再度の周旋に奔走していたところ、五日に慶喜より小松の召命があり、大久保と同道して伺候した。慶喜は御沙汰書について、「此節勅書ニヶ条（参勤交代・諸侯妻子在府の復旧および毛利父子・五卿の東行中止）之趣、別テ御至当之御趣意ニ候処、何分御書面迄突然御下ヶ相成候テハ、迎モ現事被相行候処無覺束、適被仰出候御趣意、是非空言ト不相成候様、手数ハ尽シ度事」と内容は最もではあるが、突然御沙汰書が交付された場合、その実現は覺束ないとして、是非空事にならな

いように手を尽くしたいと述べる。

幸いなことに、「松平伯耆守滞坂故、早々御招呼御趣意柄御諭解被成下、右之勅書御渡、早々東下被仰付候ハ、先少々ニテモ御趣意貫徹致シ候儀ト御勘考候」と、本荘老中による内々の持参・東下を提案し、一方で「外二段々異説モ相立、御止ニ相成度ト之義モ有之候得共、一度被仰出候儀ヲ、奉返ト申ハ、条理ヲ失候故、決テ御不同意思召サレス候」と御沙汰書の朝廷への返却は断固不同意であると力説する。そして、「右通ニテ宜敷候ハへ則二條公江形行言上之賦ニ候間、尚所存承度ト之事」であつたため、「其通ナレハ、別テ御宜敷候」と小松は回答し、退出している。早速、原市之進が二条閑白に対して、薩摩藩が同意の旨を言上し、その後十日の朝議で本件は確定した。

慶喜の周旋は薩摩藩にとつても満足できるレベルのものであり、大久保も一四日に参内を命じられた本荘が、決々ながらも同意したことを確認し、「此上於閑東尊捧之処、何共難図候得共、右通断然御沙汰相成罷候得ハ、責ヲ塞候訳ニテ、先々大慶之義ニ御座候、伯耆守御請之処如何ヤト懸念仕居候処、十分之御都合ニテ、頓ト安心仕候」^⑤と満足感を表明して「最早結尾相成候」と帰藩を明言し、二三日に離京した（四月三日鹿児島着）。なお、本荘は翌一五日には早速離京している。

三月二日御沙汰書によって、中央政局の再編が齎されたことは看過できない事実であろう。前述の通り、一会桑勢力は基盤が脆弱であり、かつ慶喜と朝彦親王・二条閑白の連携は確立したものは言い難いレベルであった。しかし、御沙汰書の直接降下を阻止する過程で一会桑勢力は急速に結びつきを強めた。また、朝議での審議事項について、予め一会桑勢力に打診するという政治体制が構築されることになる。本件は議奏六条有容がフィクサーとなって周旋しており、その後も朝議と一会桑勢力の接点となり続けた。ここに、肥後藩家老上田久兵衛を加えた布陣が中央政局で枢軸を形成した。なお、薩摩藩は三月二日御沙汰書の交付にこだわる余り、結果として慶喜の取り込みを果たせなかった。

ところで、鎮圧された天狗党への幕府の過酷な処置（斬首三五〇名、遠島一三七名、追放一八七名）について、前述の通り、久光も非難していたが、大久保も「其取扱苛刻ヲ究衣服ヲ剥取赤身ニなし、束飯ニテ獸類ノ会釈ニ候由、是ハ田沼取計ニ而橋公遍江ハ邊全ク談合ニ不及候由、実ニ聞ニ不堪次第也、是ヲ以幕滅亡之表ト被察候³³」と幕府の処置は受け入れられないとし、これを機にした幕府の滅亡にまで言及している。

また、幕府からその内三十五人を薩摩藩に流罪とするので、迎船を敦賀まで回送することを命じられたが、「古来よ

り降人苛酷の御扱い相成り候儀、未だ嘗て聞かざる処に御座候、然るに大法に安んじ、死を甘んじて誅戮を受け候に付いては、大いに尋常の振舞御取り忖成し下され、軽輩においては、御宥免の御沙汰在らせられたき儀と存じ奉り候³⁴」とその処置を非難し、若年層の罪の軽減を懇請した。更に、「是非共流罪仰せ付けられず候わで、済ませられずとの御儀に御座候わば、弊国にては降人嚴重の扱い方、道理において出来兼ね申し候間、屹と御断り申し上げ候様、分けて申し来り候に付き、何卒御聞き済み成し下されたく願ひ奉り候」と幕命を峻拒しており、薩摩藩の抗幕姿勢をここでも確認できよう。

2 将軍家茂の進発と薩摩藩の藩是推進

2・1 進発前の中央政局対応と藩政改革

三月二日御沙汰書の老中本莊宗秀への交付によって、薩摩藩が企図した参勤交代・諸侯妻子在府の復旧および毛利父子・五卿の東行中止の見通しが立つたため、中央政局から在京の小松帯刀・大久保一蔵・西郷吉之助の帰藩が叶う状況を呈し始めた。島津久光は藩地に割拠して、貿易の振興や軍事改革・武備充実による富国強兵を目指すことを藩是としており、幕府から距離を置いて将来の戦闘に備えるという抗幕志向を明確にし、西国諸藩連合を構想していた。小松らの帰藩

は元治元年秋以降の既定路線であり、藩政改革が優先されることになる。

大久保は参勤交代等の復旧を阻止するため上京していたが、その目処が立ったため、元治二年（一八六五）三月二日に離京した（四月三日鹿児島着）。一方、西郷は二月六日、村田新八・坂木六郎と鹿児島を出発、大宰府経由で三月五日には博多を発ち、一日に上京した。その事由は、そもそも大久保の周旋を援護射撃するためであったが、博多の吉井友実より「五卿扱向之儀、当藩（福岡藩）之俗論嫌疑を恐れ、甚以龜抹之次第、纔八疊敷二五人御同座之由、御付之壮士輩憤激いたし候も当然之事二候、右次第二而御転座涯より段々混雑」と、約束と違つて五卿が罪人同様に極めて冷遇されているとの報告があった。

更に、吉井は「寺石（中岡慎太郎）も当所江出懸居、折角尽力之折柄二而直二面会、不遠西郷上京之賦御座候間、其折必五卿ニ謁シ且京師表之尽力茂仕候、御国論之段も程能安心之為申聞置候、五卿二も頻ニ御待之様子、且於京師亦々五卿転藩之命共下り候而ハ、大混雑ニ可及ハ案中ニ御座候間、可相成ハ一日も早目被差出度」と、五卿や中岡が転藩の沙汰を恐れており、西郷の到着を心待ちにしていることを告げ、至急の出発を促した。これを踏まえ、西郷は五卿の待遇改善の周旋を上京途次に図ることになった。西郷は大宰府で初めて

五卿に謁見し、京都に戻り官位を回復することに尽力する旨述べ、その後、福岡藩主黒田斉博を始め、家老やこの間の五卿動座に尽力した月形洗蔵・早川勇との会談に及んだ。

西郷は上京の趣旨を「此回幕府の命令五卿を関東へ召寄せ、隨て尾州家より五卿を五藩へ分離せよと再達の如きハ、一向に其意を得ざる所にして、弊藩などハ何れを正当として適従すべきや、頓と方饗に迷へり」と、幕府からの五卿江戸召喚と征長総督徳川慶勝からの五藩預かりの命令が齟齬を来し、どちらが正しいかが分からない。よつて上京の上、「客年來尾張總督へ追々建議論辨せし初意に違ひ、猶ほも五卿の帰洛復官を充分に周旋すべきの含なれハ、本藩よりハ月形・早川・筑紫（衛）の三士上京あらハ、共に事を謀り、拙者も大に力を得ん」と京都で周旋することを明言し、福岡三士の同伴を求めた。

更に西郷は「時機を見透し先んして長筑薩三藩の兵を上京せしめ、輩下を擁し京師の論を恢復し、五卿を奉して大に為す所ある場合もあるへし、此度拙者か上京ハ、実ハ此等の秘計を施す余地をなさんか為なり」と、薩摩・長州・福岡の西国雄藩連合による率兵上京によつて、五卿の復権と朝威の回復を図りたいとし、そのための地ならしに上京すると述べたとする。五卿は西国雄藩連合構想において、推戴する貴種として極めて重要であり、その復権のための随従という観点

は、率兵上京の大義名分にも成り得た。久光に三藩連合の意向がどの程度あったかについては不分明であるが、少なくとも、西郷は久光が首肯している西国諸藩連合の枠組みの中で、この提言を福岡藩要路にしたものであろう。

ところで、薩摩藩はこの段階でなぜ福岡藩との連携を模索したのかを検討したい。そもそも、藩主黒田長溥は久光の曾祖父である第八代藩主島津重豪の十三男であり、斉彬とも親しい関係であったため、久光も一目置く存在であった。長溥は当初から長州藩寛典を唱えており、そのため薩長融和に積極的であった。薩摩藩と岩国との関係も、福岡藩の周旋によるところであり、長州藩に服罪を勧めると同時に、総督府への寛典周旋に奔走し、五卿動座にも同意を示すなど、薩摩藩と方向性が合致していた。加えてこの間、西郷は喜多岡勇平・月形・早川らと行動を共にしており、信頼関係が成立していた。以上から、薩摩藩が長州藩以上に福岡藩を頼ることは至極当然であった。⁽³⁷⁾

さて、西郷が希望した月形は「上京せしむることハ、少しく差障もあり⁽³⁸⁾」として見送られたが、早川・筑紫・倉八権九郎らは三月六日に五卿問題の周旋のため、福岡藩から派遣された。その際に、長州藩士赤欄武人および久留米藩士測上郡太郎が同行を願い出ており、早川らは西郷にその是非を尋ねたところ、「時ありて使役することもあるへけれハ、其上京

の如きハ、此方の便利なるも知られず」との回答であったため、これを黙許した。早川らは二二日に着坂、二五日に上京して赤欄らを帯同したと留守居役東郷用人・大音兵部に諮ったところ、大音から追いつ返すように指示されたため、薩摩藩邸に西郷を訪ねて相談に及んだ。

西郷は「躰ニヨリ薩州筑前ト長州ヲ誘ツテ京都ニ兵ヲ出ス時ハ、諸藩或ハ幕意ヲ受砲発スルコトアル可シ、必スシモ恐ルニ足ラサエトモ此備モ亦為ササル可カラス、赤欄ハ因州備前ニハ知人多シト聞ク依テ彼レヲシテ因備ニ説テ薩筑長京師ヘ向ケ出兵スル時援兵ヲナサトス砲撃ハナササルヨウ説シムルニ幸ナリ」と、薩摩・長州・福岡藩連合による率兵上京の際に、幕命から他藩と交戦する可能性があり、恐れるに足らないことであるが、備えが必要である。赤欄は鳥取・岡山藩に知人が多いと聞いているので、三藩の率兵上京時、援兵はなくとも砲撃など仕掛けてこないように、両藩を説得することには役立つとして、両名の滞京を支持した。そして、既にこの件は小松も了解済であると告げ、ここでも西郷は薩摩・長州・福岡の西国雄藩連合による率兵上京を明言している。

しかし、赤欄・測上が二七日に大坂で幕吏に捕縛されたため、早川らは三藩連合による率兵上京が幕府の知るところとなり、先手を打たれることを危惧し、下坂した西郷に善後策

を相談した。西郷は「彼兩人幕手ニ陥タレハ是迄ノ密議ハ泄レルモノトシ、別段ノ計議ヲ為ササル可ラス」⁽⁴⁰⁾と他の策を講じることを説いたが、手詰まりとなった。福岡藩の周旋活動が露見したことを契機として、「豈図らんや御帰国の事に相成り残念此の事に御座候、此の度は決つて御一掃の期と渴望いたし居り候処、存外の事共に御座候」と、早川らに突然の帰国命令があり、西郷は福岡藩の親幕府派を一掃できる機会と捉えていたが、思いも寄らない事態となったと驚きを隠さない。これは、「畢竟筑・薩一致の処、幕府にて大きに嫌い居り候事と相見得、如何にもして離間の策を用いたきとの腹中へ、大音等の奸夫を餌にいたし、喜んで策を施し候ものと相聞かれ申し候」と、幕府による薩摩・福岡両藩の離間策によるもので、福岡藩内の反対派の仕業であると嘆じた。

大音はもともと親幕派であり、中央政局での朝幕関係を良好と判断し、この間の福岡藩の長州藩寛典に向けての周旋に対する幕府の嫌疑を過剰に恐れた。よって、二条関白や慶喜側近の原市之進・黒川嘉兵衛・川村恵十郎との接触を頻繁に図り、嫌疑の緩和に努めていたが、赤痢らの捕縛から一層の嫌疑を受け、幕吏から叱責を被ったことを契機に五卿関連の周旋を打ち切り、関係者の強制帰藩を実行した。そして、この機会を捉えて親幕府派が藩政を牛耳り、乙丑の獄によって尊王派を根こそぎにしてしまった。これにより、西郷が企図

した薩摩・長州・福岡の三藩連合は慶応元年段階で頓挫してしまい、薩摩藩にとつては、有力なパートナー候補の福岡藩の脱落によって、連携相手は長州藩に限られることになった。薩長融合を期せずして促進した要因の一つであろう。

なお、西郷は「是非弊国の処、孤立のものに為すの策十分これある事と相見得申し候」と、幕府の薩摩藩に対する姦計であるとし、「近來関東においては、再長征の儀を促し候向きと相聞かれ申し候、此の度は幕府一手を以て打つべしとの趣に相聞かれ申し候、勿論弊藩杯は、如何様軍兵を相募り候共、私戦に差し向くべき道理これなく候間、断然と断り切る賦に決定いたし居り候」と、この段階で他藩士に対して、長州征伐への不参加を明言していることは注視したい。月形など、福岡藩同志への強い信頼が確認できると同時に、薩摩藩の抗幕体制が既に強固なレベルにあることが窺える。

参勤交代復旧等の中止が実現し、一方で福岡藩と連携した五卿の復権と朝威の回復が頓挫したことも相俟つて、小松と西郷は四月二二日に退京し、藩船胡蝶丸で二五日に大坂を発して五月一日に鹿児島に帰藩した。⁽⁴¹⁾大久保が再上京する閏五月一〇日まで約二ヶ月足らず、小松・西郷・大久保が在京していない。これは中央政局よりも藩地に割拠して、貿易の振興や軍事改革・武備充実による富国強兵を目指す藩が優先されたことを意味しており、この三名を欠いた中央政

局では、島津伊勢・内田正風・岩下方平・吉井友実が周旋活動をするようになった。なお、四月一九日、小松は帰藩の暇乞いに正親町三条実愛を訪ねて時事に関する意見を述べており、將軍家の「上洛急ニハ不運歟⁴³」としながらも、「上洛ニ成候ハ、今一手人数召連⁴⁴」て上京する旨明言し、兵力を背景にした政局運営を示唆した。

小松について、『中山忠能日記』によると実子である正親町公董の妾（氏名不詳）からの情報（内容から、正親町公董の口述筆記と比定）として、「薩家老今般上京名前（若年之由）相応人数預り入京、専非常用意致居候由陽内咄ノ由⁴⁵」と、薩摩藩家老が大兵を率いて上京し非常の事態に備えるとの近衛忠房の話を記す。そして、「小松帯刀弥京地住居申付ノ由妻子以下登京為用意、凡百ヶ日暇ニ而先比一先帰国近日再上京之由、方今大ニ正論唱居以後役家等へ出頭ニハ、人数引連嚴重ニ尽力ノ由陽家内咄ノ由」と家老を小松と断定し、妻子を伴って上京するため一時帰国していると述べ、上京後は武威をちらつかせて朝廷に迫るとの見通しを示した。小松の中央政局における注目度の高さが窺えよう。

ところで、薩摩藩に対する中央政局における嫌疑は相当なレベルに達していた。第一次長州征伐における薩摩藩の対応が極端に寛典処分にシフトしたことを契機に、元治元年十一月下旬ころには薩摩藩には倒幕の意向があるとの嫌疑が実し

やかに喧伝されていたが、参勤交代・諸侯妻子在府の復旧および毛利父子・五卿の東行中止を周旋したことも相俟って、この時期もそれは継続していた。『中山忠能日記』によると、「薩三郎此比頻ニ討幕ノ説ヲ立内々建白之由、陽父子ハ全ク同心トノコト追々化ノ皮ヲ顕トノコト」と、久光が倒幕を近衛忠熙・忠房父子に建白しているとする。

また、中山は「此比世上之風聞頻ニ討幕ノ説有之貴藩杯ハ尤為天下可然御着眼可有之」と、某から「討幕」の風聞が頻りにあることについて、薩摩藩の方針を暗に尋ねられた某薩摩藩士の「何程傾幕ニても差当討ト申コトハ時未至、吾藩ハ唯々腐幕ノ療法而已第一ニ致居候へとも不遠吾ト腐朽候コトハ目前ト申居候由」との証言を伝えている。どれほど「傾幕」であったとしても、今は「討幕」の時期に至っておらず、薩摩藩としてはただ「腐幕」に向けた周旋を第一として実行しているが、遠からず「腐朽」を行うことは目前である」と、幕府が自ら崩れていく「腐幕」を行うという、久光の意向にも合致した方針を述べていることを注視したい。

これに対し、中山は「中々深奸曲智可恐者ニ候、以之考候へハ若哉東へハ再征ニ無之は幕威不立杯ト尻押致置京ニてハ服罪之上ハ寛大ノ御所置ヲ頻申立両方焼付候も不可知候」と、某薩摩藩士の深謀遠慮を恐るべき奸計であるとし、薩摩藩は幕府に対しては長州再征をしなければ幕威が立たないな

どと尻押しし、一方で朝廷に対しては寛大の処置を頻りに申し立てている。そして、不可能な両策を同時に求めることによって、廢幕に持ち込もうとする策略であろうと推断する。

更に、「裏（裏辻公愛）説二、長再征甚敷成候ハ、幕討ノ説も盛ニ可成九西中国ハ必薩論ニ多可同由」と、裏辻の意見として、長州再征に向けた議論が甚だしくなった場合、討幕論も盛んになり、西国は必ず討幕を唱える薩摩藩に同意すると明言したとする。このように、中央政局における薩摩藩の嫌疑は、抜き差しならない状態であったことが確認できる。一方で、「裏へ時勢内問之処、薩益宜但由断不成由」と、裏辻は薩摩藩を油断できないとしながらも高く評価しており、薩摩藩に対する見方が変わる萌芽もあった。また、中山が「薩西郷吉兵衛弥出頭、此者出頭周旋中、薩論可為正義諸藩見込之由、若被退之節ハ必奸邪可相生、以此士之進退正邪之國論可分由也」と、極めて高い評価を西郷にしていることは注目に値しよう。

こうした中央政局を余所に、薩摩藩では藩政改革が推し進められていた。中でも最重要の事象は、海軍力の向上であり、将来の幕府海軍との戦闘の可能性も視野に入れながら、貿易振興における輸送船としての役割も大いに期待されていた。文久三年七月の薩英戦争によって、天佑丸・白鳳丸・青鷹丸を失い海軍は全滅していたが、その後九月に安行丸を購

入し、元治元年一月から運行を開始し、同年中に平運丸・胡蝶丸・翔鳳丸・乾行丸・豊瑞丸を長崎で購入した。また、五月九日には蒸気船運用術教授として中浜万次郎の招請を幕府に嘆願して了解を得ており、軍艦奉行勝義邦の建言によって、幕府が神戸に設置した海軍士官養成機関である神戸海軍操練所に、伊東祐亨を始め数名を派遣した。

加えて、六月には開成所を開設して砲術、兵法、測量、航海、造船、医学等の諸科を設置した。元治二年三月には外交交渉・西欧視察・商談を目的とする五代友厚・寺島宗則ら使節とともに、十五人の留学生を英国に派遣したが、その主たる十二名は開成所の生徒であった。そもそも、薩英戦争後の談判において薩摩藩から留学生派遣の要望が出されていたが、五代の具体的な建白を受け、いわゆる薩摩スチューデントが実現したもので、その後、慶応二年（一八六六）には仁礼景範ら五人がアメリカに留学している。

ところで、薩摩スチューデントに託された使命であるが、薩摩藩を始めとする大名領にある港を外国に開き、そこで自由に交易できるように英国政府に協力を求めること、富国策を実現するために、外国市場を調査し薩摩藩として必要な製造用機械などを購入すること、強兵策を実現するために、必要な軍艦・武器などを調査・購入すること、将来に向けて、必要な西洋知識を受容するために留学生を同行させ、現地で

諸々の手配をして監督することにあつた。

また、寺島宗則は慶応元年六月六日、英国外務次官レイヤードとの会見を実現し、薩摩藩の正式な使節として藩政府の覚書を手渡し、英国の好意的な協力を求めた。その覚書によると、外交権を幕府から朝廷に移行させ、貿易独占権を幕府から奪うとともに、大名が治める所領において自由に港を開かせる。そして、真の意味での自由貿易を日本に齎すことへの尽力を要請している。更に、慶応二年二月九日、三月一二日の二度にわたって、寺島はクラレンドン外相との会見に臨んだが、英国政府を始めとする通商条約締結国から、「ミカド」（天皇）に以下を要請して欲しいと訴えた。

その内容は、徳川御三家、国持十八大名、その他「ミカド」が助言を必要とする大名を招集し、京都で会合をすること、「ミカド」は招集した大名に対し、すでに批准した条約に署名させること、大名による批准後、各国公使は大坂で諸大名の代理人と会合し、批准を交換するというものである。しかし、これを行うためには、「ミカド」・大君・諸大名による協議が必要となり、それは最低でも三ヶ月は要することになる。いずれにしろ、これが実現すれば、外交に関して大君と諸大名の関係が一新されるとしている。どのように一新されるか具体的な言及はないが、双方が天皇の下で外交権を有するということであろう。

続けて、このことが実現せず、大君が新たな開港場所を定めるなど、貿易独占を継続するならば、大君と諸大名は戦争を始め、日本全国が内乱状態になるだろうと締めくくった。つまり、寺島は幕府の貿易独占権を諸悪の根源として弾劾し、その打破なくしては、英国が求めるような貿易環境の整備、貿易の更なる推進は不可能であるとした。そのための、天皇・將軍・諸大名によつて日本の対外方針を決定する国是会議の開催の後押しを寺島は期待し、その先にある幕府のなし崩し的な崩壊を企図した。

この一連の事実は、薩摩藩の政治戦略を考える上で極めて重要である。当時の薩摩藩の方針は、長州征伐後の幕府の矛盾先が薩摩藩に向かうことへの警戒心から、久光は藩地に割拠して、貿易の振興や軍事改革・武備充実による富国強兵を目指し始めており、幕府から距離を置いて将来の戦闘に備えるという抗幕志向を明確にしていた。一方で、武力を伴わない外交権の移行による事実上の幕府打倒、つまり幕府を廃する「廃幕」を企図していた。慶応期の薩摩藩の動向において、これらの政略を無視することはできない。前者は武力発動による抗幕路線に、後者は大政奉還による廃幕路線に連動することになる。

さて、小松は帰藩後、海軍掛に加え集成館・開成所・他国修行等掛の兼務を発令され、薩摩藩の慶応改革と呼べるよ

うな富国強兵策を推し進めた。更なる海軍力の向上を図るため、軍艦購入を積極的に進め、慶応元年中に龍田丸・開聞丸・萬年丸・三邦丸・桜島丸（長州藩から依頼されたユニオン号）を、二年に大極丸、三年に春日丸を購入した。また、集成館に機械工場を設置し、艦船の修理を可能とし、それにかかる日数や経費の削減を実現した。加えて、軍備強化のため、慶応元年閏五月には砲術館を再興し、六月に城下六組および水軍隊に砲術操練を実施する規則を定め、九月に陸海軍の充実を企図して兵器弾薬等の配給制を布達した。慶応二年五月には海軍方を設置し、海軍所（東郷平八郎が一期生）を開設するため、志願兵を公募するなど、制度、施設設備などの充実を目指した。更に、八月には陸軍操練所を設け、陸軍の改革を断行した。

その進捗状況について、例えば、慶応元年八月段階では、「御国許国力培養之御政道弥行れ、御小屋場江砲術方御取建二而訓練も無懈怠、君側初數十人崎陽へ砲術為練習被遣候由、一芸一能之人物無遺漏御登庸相成（略）返々不堪感服遙ニ安堵仕候而踊躍仕候、如斯盛世ハ乍恐吾国ニは未曾生と兼而惑話仕事御坐候」と在府の側役格・江戸留守居役の新納嘉藤二がその著しい成果を述べており、慶応改革は進展していたことが窺えよう。

2・2 将軍家の進発と薩摩藩の対応

将軍家茂の進発は回避できない段階に至ったが、三月一七日、幕府は朝命に従い近く家茂が上坂するとし、一方では、長州藩の処置のために進発を暫く延期し、時宜によって速に進発することを布告した。また、実際には進発に躊躇し、京都守護職松平容保に命じて、その猶予を斡旋させた。次いで、三月二九日には諸藩に沙汰して、藩主父子が江戸召致の台命を拒否した場合、将軍家は直に進発するので、予めその準備をすることを命じた。しかし、この段階でも具体的な日程は挙がらず、幕閣は将軍家の進発に消極的であった。

ところが、四月に入ると状況は一変し、進発が現実味を帯びてくる。これは、推進派の老中本庄宗秀・阿部正外・松前崇広が実権を握り、反対派の諏訪忠誠・牧野忠恭らを斥けたことによる。その背景として、三月二日御沙汰書の内容にあった。そもそも、薩摩藩が原案を作成し、交付にまで持ち込んだものであり、参勤交代・諸侯妻子在府の復旧および毛利父子・五卿の東行中止が謳われており、将軍家の上京も強く督促されていた。三月二日御沙汰書に屈する形でこれらの諸案件を認めてしまう場合、幕府の権威に止めを刺されかねない状況が現出することは、幕閣として最も回避すべき事象であった。しかも、この段階で将軍家が上洛したならば、国是の見直しとするための諸侯会議の招集が企図され、薩摩藩

の術中に陥る危険性も孕んでいた。これらを先送りにし、あるいは不問とするためには、長州再征のための家茂上坂が最善の策であった。

四月五日、幕府は老中本多忠民（岡崎藩主）に江戸留守を、老中本荘宗秀・阿部正外・松前宗広に將軍進発の随行を命じた。一三日には、前名古屋藩主徳川茂徳に征長先鋒総督（五月一六日辞退）を、彦根藩主井伊直憲・高田藩主榊原政敬に旗本先鋒を、上田藩主松平忠礼・丹後田辺藩主牧野誠成・高遠藩主内藤頼直・鳥羽藩主稲垣長明に同左右備を、和歌山藩主徳川茂承（五月一二日征長先鋒総督任命）・延岡藩主内藤政挙・松本藩主戸田光則に同後備を、大多喜藩主大河内正質・岩村田藩主内藤正誠に随従を命じた。四月十五日、幕府は家茂進発のため、大老酒井忠績に留守を命じて政務を委任した。更に、中国・四国・九州の諸侯に対して参勤交代を免除し、後命を待つことを命じた。これは將軍家進発にかこつけて、事実上の参勤交代の復活を断念したことに他ならない。

一九日には將軍進発の期日を五月一六日と定めて、これを公布し、四月二四日には所司代松平定敬が奏聞した。加えて、四月二〇日、幕府は家茂進発のため、広島・宇和島・大洲・龍野諸藩に毛利父子の江戸護送の前命を停止する旨、伝達した。なお、幕府は一九日に進発に反対していた老中牧野

忠恭・諏訪忠誠を罷免した。ここに長期間懸案であり続けた將軍家の進発は決定を見たが、三月二日御沙汰書の内容を巧みに無視する状況を作り上げており、朝廷から指示された上京ではなく、自らの意思による長州再征のための上坂と規定された。

五月一六日、將軍家茂は長州藩征討のため、陸路で進発を開始した。閏五月二日入京・参内し、進発の事由を「毛利大膳儀、昨年尾張前大納言迄悔悟伏罪之趣申出候処、其後激徒再発ニ及じ、加之私二家来外国へ相渡大砲小銃等之兵器多分ニ取調、其上密商等如何之所業確証モ有之候ニ付、進発仕候事⁴⁷」と言上した。「激徒再発」は高杉晋作の功山寺挙兵（元治元年十二月十五日）に始まる内訌戦を指しており、後半の部分は四月一九日の「防長征伐ニ付大樹公進発ノ旨觸書⁴⁸」に含まれた「不容易企有之⁴⁹」の内容である。これについては、朝廷・諸藩において、どのような企てがあったのか不分明であったため、物議を醸し出していた。

將軍家からの言上に対し、朝廷から家茂に対し大坂城に留まり、一会桑勢力と協力の上、「當國家如何之形勢仍致勘考、天下太平ニ至ラシムルノ策急度可致施行之事⁵⁰」、具体的には「防長之所置遂衆議言上之事」が勅語として伝えられた。こうして、家茂の滞坂は大義名分を持ち、江戸・京都に分断されていた幕府機構は、畿内政権とも言える政治体制を採るに

至った。家茂は二五日には大坂城に入り、同日に將軍の在坂中、隨從諸有司は日々登城することを、二九日には練武に励むことを命じた。また、六月にも將軍麾下に対し、大坂玉造講武所において鎗・劔・砲術等を訓練させ、家茂自らが幕兵や諸藩兵の閱兵をしばしば行うなど、士気の維持に努めた。

しかし、家茂の大坂入城から三週間ほど、幕閣は大坂に一堂に会しながらも、協議らしい協議は行わず、全く長州征伐に対する方針を示さなかった。幕府はこの間、無為に日数をただ重ねており、駐屯兵は無聊に窮し、しかも猛暑のため病死するものが続出する忌々しき事態に陥っていた。これは、そもそも長州藩処分について、意見の調整などする必要を感じておらず、將軍進発の報に接した長州藩はその威光に屈して、直ぐに服罪の使者を派遣するものと捉えていたからに他ならない。進発はしたものの、当初から武力発動に消極的であったことは否めず、幕府權威の更なる失墜を招来する結果となった。

薩摩藩の進発に対する反応であるが、大久保は「幕府も別而憤発二而、長州征伐之再挙有之大はつミ之由ニ被聞申候、是は別而面白キ芝居ニ成リ可申と樂ミ申候⁵¹⁾」と幕府の方針を揶揄する。そして、「大抵我思ふ図ニ參申候間、彼ハ彼レ我ハ我にて大決断策を用ひ不申候而ハ相済不申候間、必御氣張可被成候」と、割拠方針の徹底を訴えた。また、西郷は「弥

発足の様子自ら禍を迎え候と申すべく、幕威を張るところの事にては御座ある間敷、是より天下の動乱と罷り成り、徳川氏の衰運此の時と存じ奉り候⁵²⁾」と、家茂の進発が天下動乱を招き、將軍家の没落に繋がると指摘する。そして、「三年も浪花城に罷り居るとは、何と申す迂説にて御座候や、一年も六ヶ敷御座候わん、何も扱置き、此の節の進発、天下のため雀踊此の事と存じ奉り候」と、大坂城での滞在は一年が限度であろうとの見通しを示し、今回の進発は抗幕体制構築にプラスになるとの意向を述べた。

薩摩藩廟は大久保を上京させ、取り敢えず情勢探索と長州再征を阻止する周旋を行わせることに決した。大久保は五月二一日に鹿児島を出発、閏五月一〇日には入京し、近衛忠房(二一日)・正親町三条実愛(二二・一八日)に対して、長州藩処分は將軍が在京の上、衆議に諮って決定し、征討は軽々に踏み切るべきではないことを勅書で命じることを懇請した⁵³⁾。なお、朝彦親王には一五・一八日に謁見しているが、「拝謁丈ハ被仰付、程能キ御会釈ニ御座候⁵⁴⁾」程度であり、関白二条斉敬からは都合が良い時に知らせるとの伝言があったものの、「何タル儀モ無御座候故、態ト此方より相伺不申」といった有様であった。

大久保はこのような中央政局について、朝廷は「何分三藩今入説ヲ以、相固メ候故、卓越之御腹不相居勢ニ被推候、御

通病無是非御事ニ御座候」と、一会桑勢力によつて取り込まれており、それに対抗しうる卓越した人材に乏しく、相変わらずの因循に流れている状況を悲観する。そして、このような状況であるため、「征伐之綸旨サエ出不申候テ、逆モ不可成儀ヲ、如何様奔走イタシ而モ、無用ニ属スル而已ナラズ、却而害ニ成トモ難凶故、正三卿、内府公迄二十分之議ヲ申上、外ニ全ク口ヲ出シ不申候」と、長州征伐の綸旨の要求さえ幕府が申し出なければ、到底無理をして周旋などできない。仮に奔走してとしても、無用であるのみならず、薩摩藩にとつてはかえつて害となると判断し、正親町三条実愛および近衛忠房のみには十分に薩摩藩の方針を伝えるが、その他には一切口出しをしないとの方針を示した。

大久保は続けて、「難差置大事ニ臨ミ候而者、不及論候へ共、其余之儀ハ差置、益至理至当之筋ヲ明カニシ、肅然トシテ其時機ヲ見合候方、可然申談置候、必不遠御趣意相顯レ候外有御座間敷奉存候」として、当面の周旋中止を宣言した。一会桑勢力と二条閑白・朝彦親王が強固に結びついた中央政局において、薩摩藩がなす術がない状況にあることを小松帯刀に申し送っている。このような中央政局の形勢も相俟つて、薩摩藩の方針は藩地への割拠体制の構築へと一層加速し、慶応改革が推し進められることになった。

ところで、大久保の上京前、小松・大久保・西郷が不在の

京都では、將軍家の進発にあたつて、在京要路は大きな不安を抱いていた。岩下方平は四月三〇日段階で、大久保・西郷に対して、「御用向相片付申候ハ、早御上京不被下候而ハ、私共手ニ合不申」と上京を要請していたが、進発が開始されると至急の上京が期待された。よつて、五月二四日、岩下は帰藩して小松・西郷らの上京を促すため離京した。

この間の事情について、小松書簡（大久保宛、閏五月一日）⁽⁵⁶⁾によると、岩下方平が閏五月六日に帰藩し、「御進発も無相違由右旁ニ付、誰そ出京被仰付度趣共委曲承申」したが、大久保が上京すれば岩下が帰国するには及ばなかった。その後、岩下から久光に対して、中央政局の情勢を詳細に言上したところ、「猶亦勘考いたし候様御沙汰ニ相成、熟及勘考候」との沙汰があつた。そもそも、「何分此節之機は不容易一大事之場合と存とちら二しても六ヶ敷事と存申候間、被差出候方可宜貴所御出張ニも相成居候付不被差出とも可宜も考候得共、忝人よりも忝人ニ而尽力相成候得は大キニ力之付候儀も有之候付」、西郷の派遣を決定した旨、大久保に申し送つた。この文面から、小松には中央政局に対する切迫した心情は全くなく、大久保一人で十分であるものの、一人よりは二人の方が大きな力になると判断したため、西郷を派遣するとしており、薩摩藩による積極的な周旋を行うつもりが毛頭ないことが窺える。

ところで、小松が西郷を派遣するにあたり、「乍不肖僕も早々駈登粉骨碎身尽力いたし度御坐候得共、此節は誠重事故小子輩四五人被差出候より、西郷忝人被差出候方天下為国家可相成と存、御国元之義も此形勢ニ押移候ニ付而は、弥御軍備ハ勿論万事大變革も急ニなくて叶ん時機ニ而是非曳止度は山々御坐候得共、前文通無挹訕合ニ而被差出候筋ニ決定いたし申候間」と、極めて西郷を高く評価している。西郷は閏五月九日に大番頭・側役役料高一八〇石で一家老組に編入された。この段階で側用人一四〇石の大久保より上席になっており、長州征伐以降の西郷の藩内で高い評価が窺え、短期間での西郷の身分上昇が確認できる。なお、大久保は六月末頃に京都を出発し、七月八日に帰藩した。これ以降、西郷が中央政局のかじ取りを行うことになる。

3 長州再征の勅許を巡る薩摩藩の周旋

3・1 將軍家の長期滞坂と薩摩藩の対応

征夷大將軍徳川家茂が江戸を出立して既に二ヶ月が経過したものの、その間に期待した長州藩からの服罪使は現れなかったため、ようやく幕閣も事態打開に動き出した。六月初旬に大坂に揃った閣老・一会桑勢力、そこに諸藩の周旋方と連絡を密にする肥後藩京都留守居役・上田久兵衛が加わり、

主として、老中阿部正外と上田が中心となって、打開策が模索された。その結果、上田の建言に沿って長州藩に対する処分方針の勅許を獲得することで打開を図ることになった。

六月一七日、一橋慶喜・松平容保・松平定敬の一会桑勢力および阿部老中は揃って参内し、朝彦親王・晃親王・関白二条斉敬・右大臣徳大寺公純・内大臣近衛忠房、権大納言一条実良・九条道孝等と長州藩処分について議論し、徳山藩主毛利元蕃・岩国領主吉川経幹を大坂に召致して尋問し、場合によっては奏聞せず、臨機に処分にあふことを奏請し聴許された。よって二三日、芸州藩主浅野茂長に命じ、その内容を元蕃・経幹に伝達させ、その登坂の途次の護衛を命じた。なお、七月二日に家茂は大坂講武所に臨み、幕兵の武技を観覧しており、その後も度々繰り返し、士気の低下を防ごうとしたが、事態は遅々として進まず、効果は望むべくもなかった。

この士気の低下は深刻であり、しかも大坂市中でのトラブルも続いたことから、幕府はその対策に頭を痛めた。上田書簡（藩庁宛、八月一日⁵⁷）によると、大坂には「大兵逗留、旗下之上心弥以相弛ミ、東帰之念を萌シ候様子にて、皆々大ニ憂居申候」と、幕兵の心が著しく弛んでしまい、江戸に戻りたいの思いが生じている。そこで、「金城近辺之空地ニ、四間梁二八十間宛之仮屋百余棟、当月中二出来いたし候儀被

命候由、右は旗下之面々、町下宿ニて、市中大ニ迷惑之由相聞へ候故、不殘右仮屋え御引移之筈ニ御坐候由、依之、旗士東望之念打挫、稍鎮静ニおよひ候様子」を会津藩士外島機兵衛から聞き及んだと、極めて深刻な事態を伝えた。

幕府の命を受けた芸州藩は、七月一日に植田乙次郎を岩国に派遣し、上坂命令を内報したため、長州藩では慎重にその対応を協議し始めた。七日、芸州藩から徳山・岩国に公式に召命が齎されたため、二三日に至り、藩主毛利敬親・徳山藩主毛利元蕃・清末藩主毛利元純・長府藩世子毛利元敏・岩国領主吉川経幹は山口に会し、末家・家老大坂召致の幕命に対する措置を議し、ようやく二七日に病気による上坂辞退の弁明書を芸州藩経由で提出することに決した。八月一日に芸州藩に派遣された家老宍戸備前、藩士松原音三・小田村素太郎は一日に芸州藩世子浅野茂勲に謁見し、家老連署の歎願書を提出して幕府への周旋を依頼した。

この嘆願を却下した幕府は、八月一八日に芸州藩主浅野茂長に命じ、毛利元蕃・吉川経幹が病気であれば、代わって長府藩主毛利元周・毛利元純および家老が九月二七日を期して、上坂すべき命令を伝へさせた。そして、八月二三日、幕府は長州藩に末家・家老等の上坂の期限を伝達した旨、大坂滞陣の諸藩に回覧し、その期日までに出現しない場合は直に進攻するとして、予め準備するように命じた。これに対し、

九月一九日に藩士松原音三を芸州藩に遣し、やはり病気により上坂はできないとして幹旋を依頼した。

この間の薩摩藩の動向であるが、前述したとおり、大久保一蔵による長州藩処分は將軍が在京の上、衆議に諮って決定し、征討は軽々に踏み切るべきではないことを勅書で命じるという周旋活動が挫折し、中央政局からは手を引き鹿児島での割拠方針の徹底を図りつつあった。そのような中で、長州藩からの服罪使が現れなかったことから、幕府は焦りを覚え始めており、六月一〇日前後に大久保に対し、「此方より尽力致し呉れ申すべきとの趣」³⁸を要請してきた。具体的にどこからの要請であるかは不明であるが、当時大久保は在京していることから、会津藩士である可能性が最も高からう。

本件を大久保から相談された西郷吉之助は、「先ず手出しは致さざる方宜敷は御座ある間敷や、何分にも阿放隊と談判は甚六ヶ敷事に候わん、決つて段々御注文出で候て、実に仕方なき事に成り行き、余計の腹立ち出来候は、案中の事かと存じ奉り候」と、阿呆隊と揶揄されるような幕府軍へ加担することは宜しくなく、腹立たしい結果になると切言する。そして、「必ず現事に離れ候議論、いくらも言い出し候わん、中にも能く出来立つ向きに相成り候えば、又ぢんを廻し候は現事かと存じ奉り候に付き、矢張り幕府にやらせて見た方が増しかと相考え申し候」と、幕府は現実離れしたことを言い

出すはずで、そんな中で薩摩藩が優秀さを発揮すれば、また幕府が嫉妬するのは目に見えているので、幕府にやらせるべきであると突き放した。

西郷は続けて、「当分些か薩より口を出し候わば、幸いに打ち付け候わん、つまり受けかぶりに相成り候ては、仕方なき事に御座候、其の上此の方より周旋に打ち勝ち候わば、又々長藩の離間策を用い候儀、案中の事かと存じ奉り候間、何分御工夫願ひ奉り候、此の機会一大事の場合に御座候に付き、至極念を入れ申さず候わでは、六ヶ敷事に成り行き候わん」と、薩摩藩になんでも丸投げし、薩摩藩の周旋が成功した場合に長州藩との離間策を仕掛けてくることは当然のことであると不快感を露わにする。そして、一大事なので念を入れて検討する必要があるとの態度を示し、明日相談したいと申し送った。在京要路は、あくまでも幕府とは距離を置く方針であり、西郷も幕府を見放した言い様であった。

ところで、中央政局から距離を置いたため、兵力を削減する方向性は継続されており、その事情を大久保書簡（小松帯刀宛、七月一日）⁵⁹で確認したい。大久保は長崎にいる小松に對し、在京の西郷・吉井友実から飛脚便が鹿児島に届き、「尚亦彼表時宜見計断然人数引払之大策熟評、御国元御吟味其通決定候ハ、諸郷守衛交代も被差出ニ不及、備後殿御迎船早目廻船之都合取計可呉、仮令大樹公東下なく共、模様ニ依

り此已前之人數位残置、京・江戸共引払候様可致候間、何分早々熟評相違注進相待と之趣ニ御座候」と伝えた。

これによると、在京要路は時期を見計らって在京藩兵を帰藩させるべきであると再決議し、藩廟でそのように決定したら交代兵の上京は差し止め、島津備後（珍彦）の迎船を早めに出して欲しい。また、將軍家の江戸帰府がなくても以前の兵数だけ残し、京都・江戸から藩兵を帰藩させること大至急、評議して欲しいと大久保に懇請している。そして、「御当地評議之処も於其地御帰船之上評決可仕、御示談仕置申候間、形行ヲ以奉達御聴御家老衆江も其段申出置候間、御帰之処折角奉待候訳ニ御座候」と、小松の帰藩を待つて決定することが藩要路の決議で、久光の意向でもあると申し送った。このように、七月段階ではこれまで通り、中央政局から撤退して藩地に割拠する方向性は不変であった。

なお、大久保は「余事なれハ御評決被為在候而も可然候得共、実ニ不容易重事件篤と御評議之上断而不疑之御処置ニ出不申候而不叶訳御座候間、纔之遅速処ニ無之故、御帰見合相成申候、就而ハ其元之御用不容易急務之御事候得共、可成ハ一日片時も早目御帰之處奉万願候、外二段々相滞居候御用向も有之、兎角早目御帰不被下候而ハ難相済奉存候」と繰り返す小松の早期帰藩を懇願した。藩政は小松がいなければ、全く進展できない様子が窺え、まさに久光・小松体制による薩

摩藩であることが確認できる。

なお、その小松は六月二六日から七月二八日までの約一ヶ月間、長崎に出張した。これは富国強兵策の一環として軍艦を購入すること、長崎にドックを建設することなどが事由であった。京都には大久保が五月一〇日から六月末まで約二ヶ月間在京しており、その次の上京は九月初旬であり、西郷は五月二三日から九月二三日まで在京し、一旦鹿児島に帰藩、次の上京は小松に同伴して一〇月二五日であった。六月以降で見ると、西郷は七・八月を、大久保は一〇月を一人で在京していたことになる。

さて、長州問題は遅々として進展しなかったが、この当時の薩摩藩の幕府の動向に対する認識を確認したい。最初に、大久保書簡（新納久脩・町田久成宛、八月四日^④）によると、「幕威も益薄ク相成、閣老など別テ心配之由、最始之所存大樹公大坂迄御進発相成候得は、諸藩不招して響応、姫路迄不至父子ヲ擒にして軍ヲ奉迎と見留ニ候処、豈図熊本先鋒ヲ願、久留米随従いたし迄二而、其余四国、九州肅然鳴を潜」めていると、幕府は甘い見込みで進発に踏み切っており、西国諸侯は肥後藩などを除き、幕府を支持していないと突き放す。

そして、「天下之人心征長ヲ不諾、現実之形行一覽いたし、始之勢とハ大二変シ候向、逆も当分二而現ニ征伐出来候丈之

模様ニ無之」と、長州征伐は世論の支持を得ておらず、とても実行に移せないと現状を分析する。閣老は今回の進発は將軍家が独断で決めたことであると嘯き、その責任を將軍家のみに転嫁しており、その罪は重いとする。そもそも、進発の基は「第一会より釀候訳ニ而、是非長ヲ屠テ幕威ヲ興張之趣意ニ被察、今度大樹公参内之節も専閣老ヲ助ケ、仮令朝威不相立共、幕威ヲ押立候見込ニ候」と、会津藩を今回の首謀者と断定し、例え朝威が立たなくても幕威を押し立てる魂胆があると糾弾する。

慶喜は「誦詐無限趣意隠然」、桑名藩は「尊幕不足論」であり、「三藩幕ヲ補助スト雖トモ閣老辺一同一和トも難申形勢ニ候、反面内輪之動乱も難図機も有之候」と、幕府内部の閣老と一会桑勢力間の不協和音の存在を指摘する。このような状態では、「清国之蹤跡ヲ踏候ニ相違無之、実ニ悲憤言不堪候」と、清のような植民地化の道を辿る筈であると慷慨しながらも、長州藩は下関戦争以降、「暴論過激之徒大抵眼ヲ豁開シ攘夷之不可成ヲ弁別、大二国ヲ開ク事ヲ唱候人心ニ相成候」と、通商条約容認に転換した長州藩に親近感を示す。

大久保は続けて、「若大樹家竜頭蛇尾ニシテ東下相成候ハへ益命令不被相行、各国割拠之勢不可疑」と、將軍家が江戸に戻れば幕命に従う藩はなく、割拠状態になることは疑いない。よって、「富国強兵之術必死ニ手ヲ伸シ国力充滿、仮令

一藩ヲ以ストモ天朝奉護皇威ヲ海外ニ灼然たらしむるの大策ニ着眼するの外無之候」と、富国強兵を必死になつて実行して国力を充実させ、例え薩摩藩一藩であろうと朝廷を御守りして皇威を海外に輝かすことに尽力する決意を示した。そして、西洋で購入した軍艦・武器の至急の発送を依頼している。ここからも、中央政局から距離を置く薩摩藩の抗幕姿勢と割拠方針、富国強兵に邁進する志向が確認できる。

次に西郷書簡（大久保・蓑田伝兵衛宛、八月二三日）⁽⁶¹⁾によると、「此の度の再征は全く名もなきものと相成り、条理を失い候儀と形行き、益先暗き方に陥り申し候、いずれ理を失い候わば、勢いを以て押して懸からず候わでは、致し方これなく候え共、勢いは相衰え居り、幕府一手を以て戦は出来申さず」と、長州再征は大義名分もなく見通しなども全く立たない状態で、幕威は著しく衰え幕府軍だけでは実行できないと断じる。そして、「諸藩の兵を募ぶと申しても、名の立て様これある間敷、理勢共に失い候ては、尾のとれ候処如何相成るべく、最初名義を正しく致さず候て、胸算を以て諸藩応ずべき事と軽卒に動き立ち候故行先拙策に陥り候事にて、大坂中の人氣は弥増しに悪敷、悪評判行われ、笑止千万の事に御座候」と、最初から名義を明らかにせず幕令を発し、諸藩は従うはずとの目論見も外れて人心も失い、笑止千万な状態であると酷評する。また、長州宗藩および支藩がなかなか

幕令に従わず、「紛々の計らいにて実に阿放を極め申し候事に御座候」と、幕府の二転三転する政策を揶揄した。

西郷は続けて、上京命令に応じない場合、九月二十七日を期して征討を開始するとの幕命を報じ、「初めの議論にさへ負を取り候わば、戦は尚更出来申す間敷、もつともおかしな事に成り行き申し候」と、幕命は実行不可能であると断じる。また、会津藩士諏訪常吉が海江田武次に対し、「初めに再征と仰せ出され候儀、誠に失策」と今更大義がないことに動揺し、再征を忌避する態度を示しており、しかも「薩州より周旋はこれある間敷や」と吹聴していると報じ、八方塞の幕府の実情を伝えた。なお、兵士帰藩問題について、迎えの蒸気船を心待ちしているが、今もつて着船しないのはどういふことかと苦言を呈し、「此の機会を御見居これなく候わでは、御大策相立ち兼ね候わんかと、日々御左右相待ち居り候事に御座候、少少の御尽力にては、迎も此の形勢にては詮立ち候儀覚束なき事と存じ奉り候」と、削減計画の実行を強く求めた。

また、西郷書簡（大久保・蓑田宛、八月二八日）⁽⁶²⁾では、恐らく長州藩は大坂への出頭は行わないと推測され、先に一報した幕命については脅しかも知れないが、九月二十七日までに上坂しなければ、「断然の御所置相成るべくとの趣にて、大坂において諸藩へ相達し、口達を以て御国元へも人数手当

いたし置き候様」、阿部老中の公用人より達せられた。しかし、「出勢の儀は国家の大事事に候得ば、討つべきの罪を鳴らし、屹と御書付を以て、御達し相成らず候わでは、御国元へ懸け合い出来申さざる旨、申し取り候様申し遣わし候処、書面へは書き記しがたく候段返答相成り、再び押し掛け候儀も出来申さず、夫形頼れ込み候位に御座候」と、書面によらなければ鹿児島に掛け合うこともできないとしたが、拒否されたため、それきりになっていると伝えた。

そして、「幕命を以て相募り候儀は、迎も出来申す間敷、如何にもして朝命を申し下し候手筋も計り難く候得共、名に立ち候廉、益なき様に罷り成り候故、期限を誤り候事而已を申し立て候外はこれある間敷や」と、幕命では諸藩が動かないため、何とかして再征勅許を獲得しようとして、期限を設定したのではないかと推察する。幕府は「第一条理を失い候上、勢い迄も失い候ては、迎も軍は出来申す間敷やと、相察せられ候得共、断然の所置を付けるとの事に候得ば、無暗に戦を仕掛け候かも計られざる事に御座候、戦を始め候ても、益々尾はとれ申す間敷事に御座候」と、幕軍の編成は難しいとしながらも、暴発による長州再征が実行に移される可能性を危惧した。

また、幕府の過酷な手回しによって、福岡藩では乙丑の獄が始まっており、「五卿辺へ手を掛け候策これある間敷もの

とも思われず候に付き、一隊か二隊かは警衛として御差し出し相成り候わでは、宜敷は御座ある間敷、若しや欺謀を以て捕え取り候ては、御国の信義に相拘る事に候間、容易ならざる場合に御座候」と、五卿に危害が及ぶことを過敏に恐れ、薩摩藩の信義に関わるとして、警衛の守備隊の増派を求めた。そして、「譬右の策これあり候共、御国元より御人数差し出され候えば、決して手出しは相成り申す間敷事と存じ奉り候」と、増派があれば幕府は手出し不可能であると断じた。

中央政局に変化の兆しが見られ、しかも、幕府が長州征伐の勅許獲得に動くのではないかという一報は、薩摩藩に大きな衝撃を持って受け止められた。このままでは朝廷は幕府と一体になって幕政を支持し続け、これまで実現の可能性が低いと見ていた再征がいよいよ実行に移されるかも知れないという危機感を齎した。よって、小松の上京を模索したが、大久保も西郷と交代するために上京しており、西郷の帰藩を待つて出発することにした。

一方で、朝廷においては遅々として進まない長州処分問題に苛立っていた。孝明天皇の意向の下で、朝議は朝彦親王・二条関白によって掌握されており、幕府（一会桑勢力）支持を鮮明に打ち出していたため、幕府の失政はそのまま朝廷中枢のダメージに直結することになった。孝明天皇は、詳細は

不分明であるが「後宮嬪惑乱一件」⁽⁶⁴⁾（天皇は藤宰相こと藤原房子およびその一派を度々非難している）もあってか、讓位を仄めかしており、朝彦親王が心痛のあまり体調不良となっている。朝彦親王は八月三日に松平容保に対面し、「天下且徳川氏行末如何可相成哉、幕者日増ニ金ヲツイヤシ実ニ日光ニ當リ氷リ之如消ニ有哉如何ト申入」⁽⁶⁵⁾れたが、容保は「乍尤コマリ候事」と回答するに止まった。また、八月四日には二条にも、「禁中之模様且華城之模様実ニ歎息失望」と申し送った。このように、朝廷内には動揺と幕府への不信が抜き差しならないレベルに達していた。

また、薩摩藩への嫌疑は継続しており、「関東居残之人々江サッシウ人申合、摂海江夷船可相廻之旨風聞之由」といった風聞が宮中で囁かれた。しかし、薩摩藩の動向そのものについては、余り関心は払われておらず、八月二七日の段階で朝彦親王は「薩州在京之人無用之者可致帰国同様之人計可殘達之旨内々承り」、初めて聞いたことだったため、「関白へ承合候処、不存旨返答候事」と二条に確認したところ、関白も知らなかったとしている。一方で、中山忠能は「薩人各帰国之用意致由怒何事哉不審、薩引之節ハ陽明同可被寵居頃日有説也奇恠之世姿也」⁽⁶⁶⁾と日記（六月八日条）に記しており、その段階から薩摩藩の動向に不審を抱いていた。いずれにしろ、朝廷と薩摩藩の関係が急速に冷却しており、薩摩藩の中

央政局からの離脱志向が確認できる証左である。

なお、江戸においても薩摩藩の動向は注視されていた。一月一三日、高鍋藩世嗣・秋月種樹は松平春嶽に書簡を發し、「薩州家来不殘帰国相成候由、一同怪ミ申候何故なるか不知」⁽⁶⁷⁾と訝しんだ。秋月は当時、家茂の侍読を務めて幕府の情報に通じており、中央政局のみならず、江戸においても薩摩藩の動向は喧伝されていたことが窺える。また、京都においても江戸藩邸の引き払いについては話題になっており、「薩人追々帰国之事景恒門人多有之右輩咄ニ、当地ハ少人数ニ致候付追々帰国之由申候子細ハ不分、尚御聞邊同度候岡崎村屋敷地尻も拂候由、又江戸中屋敷ヲ引登セ大坂迄来有之候ヲ段々拂候由、詰り余リ手弘ニ致不勝手分義カトモ申候へとも左様之事ニハ有之間敷真偽難計候」⁽⁶⁸⁾と、京都情勢と共に注視されていた。

また、薩摩藩と一会桑勢力との関係も悪化していた。伊達宗城は春嶽に対し、「一橋会等も近來は幕疑を顧念候ニや外藩とハ先ッ絶交同様薩杯も手を引申候」「薩も近頃は小松杯皆々引拂申候、尤帯刀は不遠又上京可申候得共、会藩幕疑を受候ハ外藩と結懇信候故と存候也外藩薩熊初先は絶交同様、又一昨秋分會薩は水魚之处暮氣傳染哉、頗薩を疑候事強様子、是尤可憂之至離間策ニ落入候様存候」⁽⁶⁹⁾と報じた。これによると、特に会津藩が幕閣の嫌疑を恐れ、薩摩藩と疎遠に

なっている状態を伝えている。薩会間の離反が相当なレベルにあることは、既に中央政局の不安定要因になったいたことが窺われる

ところで、晃親王は島津久光に書簡（九月八日付）⁷¹を發し、当時の朝廷事情を吐露している。それによると、国事掛は毎月四・一四・二四日の三回ほど朝議に参会するものの、いつも議題がなくすぐに散会となり、軽事は一橋・会津藩の周旋方が二条閑白・朝彦親王に、重事は慶喜・松平容保が二条閑白に相談して決めてしまい、国事掛でさえ知らない機密が多々存在する。二条閑白は何事につけ一会桑勢力へ委任しており、「画三年ノ中二御一和、天心御安福ノ処ニ移シ候度、何分く御心長ク行末御覽被下候様との事共、惣而其趣ニ被任候事」と、二条閑白の並々ならぬ一会桑勢力への依頼を告げる。

しかも、議奏・武家伝奏（両役）への御沙汰なく、「先々内外御用向悉く会之老臣江殿・尹より御内話、会・桑ノ論ヲ殿下ノ思召又ハ尹ノ御賢考ト被称、両役江被仰出候事ニ相成候」と、会津・桑名両藩の藩論が二条閑白・朝彦親王の意見として両役に伝えられる。そして、「一・会・桑ト順々唱候得共、実ハ会・桑・一ト可謂勢二候、万々御推察ト存候」と、一会桑勢力と言いながらも、実際には「会桑一勢力」であると指摘する。当時の中央政局が、会津藩によって牛耳ら

れる実態を悲観する。

また、二条閑白・近衛忠房・正親町三条実愛・久世通熙は「王政復古・皇国挽回」、徳大寺公純・朝彦親王・飛鳥井雅典・野宮定功・広幡忠礼・六条有容などは「藩説ヲ破り、幕吏説已ヲ信用」と色分けする。そして、昨秋以降は「外藩ノ士忠告申入候得共、速ニ会・桑江御漏しニ相成り、公卿も正論内言上候得共、是又幕吏工御漏しニ相成候故、国事掛り両役一同不存事も、三藩吏ニ漏レ、武門不平ト相成候趣ニ候」と、有志の忠告は悉く一会桑勢力に漏れる現状を憂える。加えて、「尹宮・野之辺は内府公・晃・正三辺ヲ薩説家ト称、大ニく忌ミ惡ミ、可成丈ケ機事ハ不為聞方ト申御説ニ相成候、一時ハ参内も可被止勢ニ候」と、近衛忠房・正親町三条実愛と共に薩摩藩寄りとして嫌われ警戒されている様子を伝えた。このように、薩摩藩が朝廷に入り込む余地がなく、手詰まりになっていたことが窺える。

3・2 再征勅許に関わる幕薩対立

慶応元年九月一日、將軍家茂は征長勅許の奏請のため、大坂城を發して上京の途に就き、翌一六日に二条城に至った。支藩主や宗藩家老が大坂召還の幕命に対し、病氣を理由に一切応じない現状を朝廷の權威によって何とか打破しようとする窮余の一策であった。これまでも、一会桑勢力は勅許

を獲得すべく、二条閑白・朝彦親王に入説していたが、この時期は主として会津藩士広沢安任・桑名藩士森弥一左衛門・久留米藩士久徳与十郎・高知藩士津田斧太郎らが朝彦親王に謁見し、勅許が叶うように建言を繰り返していた。

一方、薩摩藩は西郷吉之助と交代するため、大久保一蔵は八月二五日に鹿児島を出発し、九月二日に大坂に到着、その後上京したが、西郷・吉井友実が下坂して幕府の動静を窺うこととした。一三日、大久保は一端下坂して西郷らと協議の上、大久保は帰京して近衛忠房・正親町三条実愛・晃親王へ再征勅許の阻止に向けての周旋を行うこととした。その眼目は雄藩諸侯に上京を命じ、列藩会議によって衆議に諮り、長州藩処分の内容を決定することにあつたが、そこに後述する四国（英仏蘭米）代表を乗せた艦隊の大坂湾闖入の事態を迎える。

一五日、大久保は滞坂中の西郷・吉井に書簡^②を發し、江戸から飛脚が到着し、四国代表が大坂に向かったことが判明したため、状況探索が叶うまでの滞坂を依頼し、「二（二条斉敬）尹（朝彦親王）之处臭気甚敷、正（正親町三条実愛）内公（近衛忠房）より種々御論相立相成候得共、中々被行向ニも不相見得候处、何分今朝之一左右ハ無上之良薬ニ御座候」と申し送った。大久保は一会桑勢力と癒着する二条閑白・朝彦親王を忌避し、忠房らによる諸侯招集の周旋に期待をかけ

たが、その説が採用されないとしながらも、今回の外国艦隊の来航は好機であるとする。通商条約の勅許を求めて来航した四国代表を外圧として利用し、諸侯会議の開催を目指すことが可能であるとの判断を示した。

こうした中で、九月二〇日、朝彦親王・晃親王・二条閑白・徳大寺公純・近衛忠房・一条実良・九条道孝・正親町三条実愛に加え、一橋慶喜・松平容保・松平定敬等の武臣も参内し、小御所にて長州再征・將軍進発について議論したが容易に決せず、二一日の明け方に至つてようやく幕府からの建議に内決するに至った。この事態に憂慮した忠房は大久保に内密に報じ、かつ晃親王に入説すべきと命じた。これに対し大久保は、本日には將軍家の参内があるため、端的に藩意を貫徹するには実力者たる朝彦親王を説破するに限るとターゲットを変更し、宮邸に参殿した。

大久保は、幕府はもろんのこと朝廷からも薩摩藩は嫌疑を受けているため、建白しても無駄であろうと沈黙を守ってきたが、「既ニ今日ニ至而、朝廷内外之御大事、若処置ヲ被失候而者乍恐奉勅道無之、王家之衰威顕然ニ候間、実ニ不得止一己之存慮ヲ以言上仕度参殿仕候」と参殿した事由を述べ、昨日の内決内容を尋問した。朝彦親王は、「眼前外患も迫り居候得者、内外一時難を醸候而者迎も不容易難事ニ候間、兎角列侯被為召公論を以相決候方可然与之説相立」と、

朝廷においては諸侯を招集し、公議によつて国是を決定すべきであるとの説に決定し、二条閑白から一会桑勢力へ諮問したと、この間の経緯を語り始めた。

その諮問に対し、慶喜は外国艦隊の摂海闖入については、既に阿部老中が下坂して対応しており、必ず退帆させることになるので安心して欲しい。また、諸侯召命は「大二時日を延し、其内如何之故障到来も難図、且亦幕之職掌も不相立候」と断固として承服せず、再征勅許の貫徹を主張したため夜明けまで議論し、その結果、内決に至つたと回答した。大久保は將軍家進発を巡る幕府の横暴を列挙し、幕府は朝廷を蔑にしていると責め立て、追討の名義がないにも拘らず、もしも朝廷がこれを許容したとしたら、「非義之勅命二而、朝廷之大事ヲ思列藩一人も奉し候ハす、至当之筋を得天下万人御尤と奉存候而こそ勅命ト可申候得は、非義勅命ハ勅命二有らず候故、不可奉所以ニ御坐候」と、天下万民が至当と判断しない勅許は非義の勅命であつて、諸藩は奉じないとまで切言した。

続けて、「只今衆人之怨幕府ニ帰し候処、則朝廷ニ背候様相成候得は、幕府之難を御買被成候道理ニ御坐候、ケ様申上候得は長州ニ同意或ハ討幕之趣意とか可被思召候得共、かゝる大事ニ臨ミ左様之私意を以論し候ものニ無之、只名分之所存大義之所関を以御議論申上訊ニ御坐候」と述べ、ひたすら

朝廷を尊奉するための諫言であつて、長州藩に同意しているとか討幕を企図しているとかではないと強調している。更に、薩摩藩の意見を一会桑勢力や閑老に示すことを懇請し、「義理判然可仕候、仮令其上幕罪ニ被陷候共、辞退不仕心底ニ御坐候」と、そのために幕府から罪を受けることも吝かではないとまで言い放った。

これに対し、朝彦親王は当惑の体で、一会桑勢力が強過ぎるため、自分の力では負いかねるので、本日中に二条閑白に国事御用掛の辞職を申し入れると述べたため、大久保は「此大事ニ臨ミ御傍觀被成候而御本意ニ叶ひ可申哉、何等之為ニ御帰俗被為在候ヤト可被思召哉」とまで詰め寄つた。大久保の尋常でない物言いに圧倒された朝彦親王は、自分一人ではどうにもならないとして、添え状まで手交して二条閑白の許に至急行くように諭したため、大久保はようやく退散した。

その後、大久保は午後二時ころ二条閑白邸に伺候し、同様の入説を行った。二条は何はさて置いても、「近来此方薩を拒幕臭有之と之説、段々申触候段折々聞及甚迷或ニ存候、兎角愚蒙此方不行届之義ハ多々有之候事候得共、御名殿（島津久光）基本ヲ被為開候てこそ如此ニ相成候得は、忠誠無二之藩たる事ハ兼而所存候間左様相心得可呉」と、薩摩藩を拒んで幕府に取り込まれていると喧伝されて甚だ迷惑であり、久光の文久二年の率兵上京から朝権が上がっており、最も忠誠

を尽くしている藩であるとの意向を示し、くれぐれも雑言に惑わされないようにと述べる。そして、昨夜の会議は紛糾したが、長州再征については服罪をしていないことは明白であり、朝敵である再征は理の当然である。そこに外国艦隊の来航の一報があったが、これについては諸侯を招集して衆議を尽すことに同意したが、慶喜らがこれに反発したため、これも幕府に委ねることになったと説明した。

これに対して大久保は、この間の朝廷を蔑にして勅命に反し続ける幕府を厳しく責め立て、あくまでも諸侯招集による公論採用によって、長州再征や条約勅許について決定すべきであると固執し続けた。二条は同意したものの、一会桑勢力は辞職を仄めかして阻止を図ることは必至であり、そうなれば「忽ち混雑いさし東西隔絶を勢相違無之」と憂慮を示したため、「條理相立候御沙汰を不平ヲ生辞職退身など申上候は、朝廷ニ対し不臣之者ニ候間、其通被仰付可然事ニ御坐候」と不遜な物言いを重ねた。そして、関白職は「大事ヲ決せられ候ニ至公至平を以大義之立る処ニ而、無御観念御裁断不被為在候而は、凡而私ニ陷候右之御趣意則幕臬之評御請被成候」とまで極言したため、二条は近衛忠房・朝彦親王・晃親王と協力して尽力する旨を約し、忠房にも入説することを依頼した。大久保は「乍憚若不被行時ハ、今日限之朝廷卜奉存候」と駄目押しをして、近衛邸に移動して言上が終わったのは既

に午後六時となっていた。

その二一日夜、將軍家茂は慶喜らを従へて参内し、長州征伐の勅許を奏聞した。二条は朝彦親王・近衛忠房・晃親王らと共に慶喜・容保と対面し、前日の決定を再議し直すと申し入れたが、慶喜は「大樹の参内せらる、場合、匹夫（大久保）の議を聞かる、ため猥りに時刻を移ししかのみならず其議に劫かされて軽々しく朝議を動かさる、如きハ実に天下の至変といふへし、斯くてハ大樹始一同当職を辞する外あるへからず」と激怒した。つまり、將軍が参内しているにも拘らず、匹夫（大久保）の建言を聞くことによって、妄りに時間を費やすのみならず、それを容れて軽々しく朝議を改めると言うのは誠に天下の一大事である。こうなつては將軍以下、職を辞する他なしと極言したため、関白は返す言葉もなく、二二日の零時ころに至つて長州征伐は勅許された。なお、家茂は二三日に京都を発して大坂に帰った。

近衛忠房からの密書でその決着を聞き及んだ大久保は、二二日早朝になつて朝彦親王を訪ねた。朝彦親王は、二条関白以下四名で一会桑勢力等と対峙したものの、異論紛々で叡慮を仰ぐことになった。孝明天皇は「既ニ昨夜内定之詔も有之、此節ハ幕え委任被成、しかし薩州より為皇国言上を趣意御感不淺」と沙汰されたが、薩摩藩への理解もあることなので、遺憾ながら失望しないようにと伝えた。大久保は「朝廷

是カキリト何共恐入候次第⁷⁷」とばかり答え、早々に朝彦親王邸を後にした。

大久保は引き続き、二条閑白邸に参殿して事情を確認したところ、朝彦親王と同様な回答であり、「尚此上多難之御時節候間、不差置存寄申上候様、御頼被成候言不行ニ懲り、以来何も不申上トいふやうなる事ニ而ハ大変ニ候間、決而不平ヲ不生やふ⁷⁸」と繰り返し慰撫した。大久保は「全体言上仕候も為朝廷ニ而、決而私論ヲ以薩之ためニ申上候義ニ無之候間、不被行とて不平ヲ生候など、ハ不思寄事ニ候、しかし此度之大事去れリト可申候得は皇国忽チ暗夜ト成候心持ニ而、千載之遺憾ニ御坐候」との捨て台詞を残して退散した。これまでの元治慶応期の薩摩藩の中央政局での周旋交渉は主として小松帯刀が前面に出ていた感があつたが、今回は大久保の独断場であつた。しかも、その周旋は苛烈を極め、二条らを辟易とさせており、大久保の存在感を一気に高めたと言える。

なお、「非義之勅命」については、中山忠能は手記（九月二三日条⁷⁹）に「薩西郷弥自大坂再帰京ニて、長再征ハたとへ勅命ヲ矯シ候義ニ当リ候、兼々勅諭之御趣意ニテハ、右可被仰出訊無之ニ付、是ハ難奉遵旨申居候由」と記している。大久保の発言が既に薩摩藩論として、西郷からも発信されており、しかも廷臣間で喧伝されていることが窺える。朝廷にお

いても、その発言の影響力は相当なレベルにあつたことの証左であろう。

この間の経緯において、薩摩藩が勅命を拒否する態度を示したことを重要視するが、前年に前例があることから、本稿ではそのこと自体を殊更に重視しない。それ以上に、大久保が諸侯会議を前面に打ち出し、倒幕志向は否定しながらも、武力を伴わない事実上の「廃幕」を声高に唱えたことを重視したい。

4 通商条約勅許を巡る中央政局

4・1 外国艦隊の来航と薩摩藩の対応

元治元年八月の四国連合艦隊による下関砲撃事件後、長州藩と講和を成立させた英国特派全権公使オールコック・仏国全権公使ロッシュ・米国弁理公使プリュイン・蘭国総領事ファン・ポルスブルックは、善後処置について幕府と折衝を行った。そして、九月二二日、若年寄酒井忠毗と横浜において四箇条からなる「下関事件取極書」を協定し、償金三百万ドルを支払うか、下関または瀬戸内海の適当な他の一港を開港するかを取り決めた。幕府は慎重に協議を繰り返したが、翌元治二年三月一〇日、英・仏・米・蘭各国使臣に対し、取極書による瀬戸内海での開港が困難である国情を述べ、償金

を支払うことを通知した。

しかし、長州征伐等による財政難から、長州藩の処分が未決であることを事由として、第一回分（五〇万ドル）を本年六月に支払い、第二回分の支払を一年延期して残金は取極書の通り、三ヶ月ごとに支払う旨、了解を求めた。この要求に対し、七月一五日に至り、英国特派全権公使パークス（閏五月一六日に横浜に著任）・仏国ロッシユ・米国代理公使ポトマン・蘭国ファン・ボルスブルックは連署して、第一回分五〇万ドルを領取すること、一方で第二回分支払延期の要求は、各本国政府の判断を待つて回答することを幕府に到達した。

英国政府はオールコック後任の代理公使ウインチェスターの提案に基づき、賠償金三百万ドルのうち三分の二を放棄する代わりに、大坂・兵庫の早期開市・開港、通商条約の勅許、輸入関税の引き下げを三条件とすることとし、仏・蘭・米政府の了解を得た。よつてパークスに対し、八月一七日受領訓令でその旨を報告し、更に九月四日受領訓令で、仏・蘭・米公使と協議の上、その対応を委任した。パークスの提案は、將軍家茂が「ミカド」がいる京都に近い大坂にあり、しかも、五人の老中の内四人が随従する今が絶好の機会であり、大坂湾まで艦隊を率いて乗り込み、英国政府案で交渉すること、最初は渋っていたロッシユも歩み寄り、九月一

日には四国代表間で同意を得た。

唯一の在府老中水野忠精は若年寄酒井忠毗・外国奉行菊池隆吉・軍艦奉行栗本鋤雲を横浜の外国公使館に派遣し、その計画の中止を求めた。更に水野自身も横浜で四国代表との折衝に大いに尽力したものの、その意を果たせなかった。一日、パークスらは三条件を要求するため、軍艦九艘（英五艘・仏三艘・蘭一艘）を率いて横浜を出帆し、一六日に兵庫沖に至り、同日、パークス・ロッシユはそれぞれ通訳官シーボルト、カシオン等を大坂に派遣し、来航の趣旨を幕府に告げて応接の期限・場所を協議することを求めた。

そのため、大坂町奉行松平信敏・井上義斐、目付赤松左京は仏国軍艦キンシヤン号に乗り込み、通訳官に来航の趣旨を尋ねたが、老中でないと回答できないと拒絶されたため、一九日に老中格小笠原長行が赴き会見した。通訳官は七日以内に三条件の諾否を求めたが、小笠原は老中阿部正外が不在であるとして、二一日の英艦上での会見を約束するに止まった。九月一八日、所司代松平定敬は外国軍艦九艘が来航したが、速やかに退帆するよう取り計らうと奏聞し、二三日には阿部老中・外国奉行山口直毅らは兵庫沖に到り、四国代表と会見した。

その席で四国代表は三条件を要求し、速やかな回答がなければ上京して朝廷に要求すると迫った。阿部は税率の改正以

外は將軍家の独断では決められないとして、二六日を期して確答することを約束し、翌二四日に帰坂して家茂に復命した。二五日、家茂は幕閣を集めて善後策を協議したが、阿部および老中松前崇広は四国代表の上京を恐れ、兵庫開港を主張したため幕議は遂にそれに決した。他方で幕府は、二四日に大坂滞在中の諸侯および有司に対し、翌二五日に一役一人を登城させることを命じた。形ばかりの衆議を尽すポーズであった。

この間、薩摩藩では大久保一蔵が在京し、西郷吉之助・吉井友実が大坂で幕府および外国艦隊の動静を探っていた。西郷書簡（大久保宛、九月一七日^⑧）によると、西郷は坂本龍馬・中路権右衛門（尾張藩浪士）を兵庫に派遣したものの報告がなく、更に黒田彦左衛門も探索のため兵庫に派遣し、吉井友実も越前藩邸に問い合わせに行ったが、詳細は分からなかった。そこで、木脇権兵衛をして幕吏に問い合わせたが、ようやく艦隊の編成や小笠原が派遣されることなどが判明した程度であった。

そして、「何れ幕手を相離れ、朝廷約定の御願い申し上げ候わば、何れ各国の諸侯召し呼ばれ、天下の公論を以て、至当の御処置相成らず候わでは相済まず、只幕府より申し出で候計りにて、兵庫開港勅許共相成り候様の事に陥り候ては、皇国の御辱此の上もこれなく」と、通商条約問題が幕府から

朝廷に移管されれば、朝廷から諸侯招集が叶うとし、天下の公論によつて至当の処置が執られなければ、済む問題ではないと薩摩藩の方針を唱える。反対に、条約勅許と兵庫開港が幕府の意向のみで決まってしまうは、皇国の恥辱は計り知れないと危惧の念を示し、「事に寄り堂上方の例の恐怖心にて、義理も分別もこれある間敷か、歎息に堪えざる儀に御座候」と、相変わらず優柔不断な朝議の有様を歎じた。

長州征伐の勅許阻止に失敗した在京薩摩藩要路であったが、あくまでも諸侯招集の実現に期待をかけていた。九月二四日、西郷・大久保・吉井らは西国雄藩の諸侯を京都に会合し、これによつて再征を阻止し、合わせて通商条約の勅許問題の解決を図ることを議した。さしあたって、島津久光・松平春嶽・伊達宗城の上京を促すことにし、大久保は福井、西郷は鹿児島、吉井は宇和島に手分けして出発した。当然ここに山内容堂が入ってしかるべきであるが、容堂の招請は見送られた。後述の通り、坂本龍馬が一時候補になった可能性はあるものの、坂本は長州藩への使者となる。これは、坂本が然るべき使者と見なされなかったこともあるが、長州藩派遣が喫緊の課題となったため、見送られたと考える。なお、坂本の派遣先の変更は、時間的制約からして吉井が先発した直後、西郷の独断で決定された可能性が高い。

ところで、宇和島藩士の報告に「西郷等帰国之義賀陽宮

（朝彦親王）より御留之由、然共皆々引去候由、仮令王命無之共此大事件ニ居留も可仕処、意外之儀、是も征長一件付而之建議不被行を憤り候而之義歟、又此面々帰藩之儀近年來隅州候事を御用以來、追々諸名士御拔擢有之候処、旧來之愚輩失意之者共、君側之士之小間隙ニ乗シ、少壯輩を鼓動シ内乱之機を発シ候付、急ニ帰藩之由ニ付滞留難出來勢歟」と、それぞれの離京が朝彦親王らに訝しがられている様子が述べられている。更に、この段階で薩摩藩内に急速に勢威を増す西郷らへの対抗勢力を措定しており注視したい。

また、「薩、外ハ洋人を誘引し、内ハ征長之事ニ付朝幕を攪擾す」「薩長英船へ乗組候を幕吏横浜ニ而見届候」と伝えており、薩摩藩が長州藩のみならず、外国（英国）と結びついているとの嫌疑が中央政局で喧伝されている一端が窺える。京都留守居役内田正風は一〇月五日に御所諸大夫仮建に召された際に、会津藩士広沢安任が本件を備前藩士に語っているところに口を挟み、薩摩藩の関与を否定している。なお、本件が広く喧伝されている証拠として、尾張藩関係者の間でも同内容が共有されており、大坂からの情報として、「兵庫沖へ碇泊仕候異国船全く長州人並薩州人ニ御座候由、左候得は何レ大変ニ可相成と被存候」（九月二七日付）「異船十一艘程乗込居候中ニ薩長人も乗組有之由風聞ニ御座候」（二〇月二日付）と名古屋に伝えられている。

更に鳥取藩でも、御近習・永田蘇武之助が「此度之儀は、薩長人異船へ多人数乗込居候よしにて、兵庫開港強談之儀も、其元は薩長より起候かにて、異人計之事ニ無之、甚不審之筋有之、全長州同腹にて御加勢之儀等申立候得共、其実は如何可有之哉、其辺之処、橋公にも与得御承知ニ付、勉て御弁破に相成候様子之旨」と国許に伝えている。中央政局における薩摩藩への嫌疑は、既にこの段階で薩長融和が前提とされており、しかも、諸藩においてもそのことが半ば事実として喧伝されていた。

ところで、西郷・大久保は二〇日頃、それぞれ鹿児島に書簡（未詳）を發して状況を報じていたが、藩廟では「何分不容易事件到來仕、未だ接之次第も委細分兼候へ共、終ニ此期ニ至り皇国之御安危差迫り別而重大之一件ニ御座候得共、御示諭之通却而得機會候事ニも候半」と、我が国にとって危険が迫る大事件の出来であるが、西郷らが言う通り、かえってこの事態を好機會と捉えた。しかし、「於朝廷第一公平正大至当之御所置無之候而は、彼か術中ニ陥り受汚辱候儀も難計事御坐候間、必至ニ御尽力之所呉々も奉折候」と、朝廷が公平至当と言える諸侯會議を招集しなければ外国の術中に陥り、恥辱を受けることになるため、必死になって周旋するよう求めた。

また、西郷より状況に応じて久光の上京を求めたが、「疾

二其通二而御談合相成候半と奉存候」と速やかに応じることになるうとの見通しを伝え、「御書面之趣を以は朝議別而危害歎息ノ至、此節社皇土之大地盤相居り不申候而は、頓と挽回之期有之間敷、只々賢兄等之御尽力を奉折候外無之」と、重ねて尽力することを懇請した。鹿児島では、外国艦隊の大坂湾闖入の一報を受け、久光の上京が事実上直ぐに決定したことが窺える。久光はこの事態を逆手にとつて、京都での諸侯会議、そして外交権を幕府から朝廷に移管することを企図した。

ところで、大久保は福井に九月二七日に到着し、同夜に春嶽に謁見して中央政局の情勢を説明し、「天下の人心ハ此度の拳の名義不分明なるに疑惑を懷き居る事なれば、開戦の上暇令幕府に勝を取らるゝも、決して服従せざるへく萬一敗を取らるゝに至らは忽ち天下は大乱なるへし、実に危急切迫の秋といはざるを得ず⁸⁵⁾」として、春嶽の至急の上京と尽力を懇請した。また、久光・宗城も至急上京するであろうとの見通しを示し、春嶽と久光は「従来御同論の事故、上国に危急の事ありて猶予しかたき場合には、直に貴藩に出思召を伺ふべき旨、兼て大隅守より内命ある事故、今度在京の重臣等協議の上参上せり」と伺候した経緯を付け加えた。

そもそも二日前の二五日に、春嶽は要職会議を開き、將軍家の進発は不可であり、速やかに上坂して家茂に意見を建白

しようとしていた。これは九月二二日に近衛忠房から書簡（九月一九日付）が届き、外国艦隊が摂海に闖入しており、しかも外国人が閤老と一緒に上洛するとの風評を報じ、「何卒此節は大諸侯を被召寄衆議仰願候分他二愚存無之候、何卒方今形勢二付而は、押而御登京被成候義は難相成哉⁸⁶⁾」と諸侯を召して衆議を尽すべきであるとの意見を告げて、春嶽の上京を促しており、これに応えるものであった。忠房に対し、春嶽は大久保が到着した同日に幕府を介して上京の朝命を諸侯に伝えるべきである旨を回答しており、薩摩藩と同論であった。このような経緯も相俟つて、春嶽は大久保の意見を快諾して、早くも一〇月一日には中根雪江らと共に出発した。

しかし、春嶽はその途次に京都から福井に急行していた毛受鹿之助と行き会ひ、驚嘆の面持ちで面談した。毛受は大久保が忠房や見親王に周旋し、家茂参内の当日（九月二二日）は朝彦親王や二条関白に征長勅許は不可であることを強調し、関白の参内が夕刻になった事情を述べる。そして、朝彦親王や黒川嘉兵衛から薩摩藩と同論であることを質され、「越薩同心同力て共二上京尽力周旋之風聞京師二傳播し、甚敷二至り候而は橋館周旋方一人京都屋敷へ参り、今日は大蔵太輔上京明日ハ隅公登上之趣弥実事に候哉と、失面色余程心痛之趣⁸⁸⁾」と、薩摩藩と同心して春嶽が中央政局に乗り込むと

の嫌疑をかけられていると報じた。

毛受は続けて、「全く橋会尽力之妨と相成、殊二一蔵之建言と申、尹宮扨にても余り西上御好無之、却而御嫌疑も有之殿下亦同断なるへし、何分老生（春嶽）上坂上京候而も却而御機嫌伺之名目ニハ候とも、御邪魔と相成甚不可然」と再三申し述べ、このタイミングで上京した場合、越前藩が薩摩藩と結託するものとして、朝暮から嫌疑を受ける可能性を指摘し、暫くは藩地で政局を静観することを提言した。なお、春嶽は慶喜に「何か薩藩大久保一蔵弊国へ罷越儀二付、薩と同論ニ而主張之筋も有之哉之風説も御座候由、上坂仕候而も左様之案外之次第二而は朝暮之嫌疑も如何可有御座哉難量」と申し送っており、大久保の来訪が越前藩に対する嫌疑の発端となったことは否定できない。春嶽は福井から酒井十之丞・村田巳三郎ら重臣も呼び寄せ、随行重臣も交えて協議した結果、毛受の建言を容れて三日に福井に戻ってしまった。なお、同日、大久保は帰京している。

一方で、吉井友実は一〇月二日に宇和島に到着し、六日から三日連続で伊達宗城に謁見し、「大久保氏より朝廷へ建言の次第、且つ夷舶一条の事共委細に言上、是非共御乗り出しの儀申し上げ」、上京を強く求めた。しかし、宗城は「如何にも議論の処は同意に候得共、唯今上京致し候ても如何尽力致すべきや、頓と目途相立たず」と上京しても無駄であると

し、「此の方も幕府の嫌疑を受け居り候得ば、迎も議論の相立ち候訳にこれなく」と、重ねて上京を拒んだ。宗城の幕府の嫌疑を恐れる頑なな態度を翻すことは叶わず、その上京は実現しなかった。なお、吉井は一八日に帰京している。

ところで、宗城は松平春嶽に書簡を発し、「狼兄（山内容堂）方へも坂下龍馬馳下事情陳論可致と存候間、此頃為談合家来遣置候、迎も一両輩出候而も建議おし拔居候程如何と存候」と、薩摩藩は我々同様に容堂に対しても使者を派遣するとし、それを坂本龍馬と明言している。吉井からその件を聞いたと思われるが、坂本が談判のために土佐藩に送り込むという奇策は注目に値しよう。実際には坂本の派遣は実現しなかったものの、宇和島から土佐に使者を派遣し、上京について談合までしていることから、宗城はその実現性を高くとらえていたことが窺われる。この事実からも、坂本は薩摩藩士として、西郷らの下で周旋活動をしていたと考えられる。

さて、西郷は九月二十六日に胡蝶丸で大坂を出航し、一〇月三日に鹿児島に到着、早速久光・茂久父子に謁見して久光の上京を求めた。これを踏まえ、六日には小松帯刀から「摂海へ夷艦渡来重大の御難事に付、依時宜大守様中将様御一統可被遊御上京も難計候二付、萬端手当可申渡旨被仰出候條可承向々へ可申渡候」と、久光・茂久父子の率兵上京のための準備をするように沙汰がなされた。

しかし、後述の通り、通商条約が勅許されて外国艦隊も退帆したこと、また、諸侯召命が朝廷より幕府に沙汰されたものの、幕府からの沙汰が今もってないことが、井上大和の帰藩及び大久保書簡から明らかになったため、久光父子の出兵を中止し、小松・西郷がその代わりに一五日に海路率兵上京を開始し、長崎を経て二五日に着京した。この間の大久保を中心とする過激な中央政局での周旋活動によって、薩摩藩は朝幕双方から著しい嫌疑を蒙っていたが、今回の率兵上京によって、更にその嫌疑は高まり、深甚な緊張関係が齎されることになった。

4・2 通商条約勅許に関わる幕薩対立

このような薩摩藩の動向に対して、一会桑勢力は甚だしく警戒感を強めており、薩摩藩は長州藩と連携している、更には、外国勢力とも繋がりがあるとの疑惑を持たれていた。例えば、九月二八日に岩下方平は朝彦親王を訪ね、「昨夜黒川嘉兵衛、夷船二薩長之人多人数ノリクミ居候由咄、然ル処永山左近（薩摩藩士）当番故直様屋敷返右之ヲモムキ申聞候ニ付、彼屋敷ニ於議論フツトウ夷船江応対いたし糺度旨⁹³」、談合に及んだ。黒川がどの程度の確信を以て語ったかは不分明であるものの、薩長が一括りにされて外国勢と繋がっているとされては、薩摩藩邸が沸騰するのも無理はなからう。この

場は朝彦親王が、尤もなことであるとしながらも、「朝廷令今日ニモ御サツトウニ相成候而ハ困」るとし、本件は自分が責任を持って対処するとして岩下を帰らせている。

一方で、九月二十九日に京都留守居内田政風が朝廷に対し、兵庫開港の不可を述べ、諸侯を召集してその開否を衆議で決定すべきであり、もし外国艦隊が不法な行爲に出た場合は、率先して在京藩兵が撃攘すると建言した⁹⁴。こうした薩摩藩の過激な言動は、朝廷や幕府の嫌疑はもろろんのこと、薩摩藩の疑惑を遥かに超えて外国勢力からも疑惑の目を向けられることになり、これ以降の大きな難問に発展する。特に英国との関係は、パークス公使からも嫌疑を受けたことから至急の関係修復を企図し、翌慶応二年六月のパークスの鹿児島訪問に結実した。

こうした中で、九月二十四日に將軍家茂から至急の上坂を命じられた慶喜は、二六日に大坂城に登城して兵庫開港という幕議決定をご破算にすることを迫った。その上で、慶喜は改めて將軍が上洛して勅許を奏請すること、また、四国代表に十日間の猶予を求めることを提議してそれに決した。そして、若年寄立花種恭・大目付田沢政路らを兵庫に急派し四国側の了解を得た。しかしこれ以降、朝幕間意思疎通を欠き、二九日に朝廷は幕府に阿部・松前両老中の官位を剥奪し、藩地において謹慎させ後命を待つことを命じた。一〇月

一日、幕府は兩名に罷免謹慎を命じたものの、朝廷が直接、幕府人事に介入することは前例がなかったため、大坂城中での幕議は大いに動揺を来たし、家茂は前名古屋藩主徳川茂栄を上京させ、将軍辞表および条約勅許・兵庫開港を奏聞した。翌二日、幕府は家茂の軍職を慶喜に譲り、明日大坂を発して伏見を経て帰府する旨を布告した。

ところで、江戸において将軍辞職問題はどのように捉えられていたのか、高鍋藩世嗣・秋月種樹書簡（松平春嶽宛、一〇月三日）^⑤で確認したい。今回の「大坂一大変事」は老中阿部正外・松前崇広による「過拳」であり、「輕拳之妄動大將軍之威光も損し恐入候次第奉存候、一橋公へ御讓位之一條御所ニ於而も嘸々御当惑と奉恐察候」と將軍の威光も損じてしまい、慶喜への將軍職交代には朝廷も当惑したのであるうと嘆じる。そして、「堯舜之授受と違ひ一時之憤怒お起る匹夫匹婦之振舞ニも劣り、征夷大將軍御重任を被為負候御身柄之被成方ニは無之、全く二閣老大君を奉遷蔽候仕方、重々恐入候次第、唯々仰天仕候」とこの間の経緯を痛烈に批判して、その責任を二閣老に帰して断罪する。

また、「夷人へ頼ミ天子を亡し諸侯を亡し天下郡県之世となし、大樹公を以て天下大統領となし才智あるもの政を執る可きの論を建候由、夫故事を誤候と存申候、併し是は松前のみならず幕府諸史当今当路之者は此説なり、就中二閣老酒井

飛騨守御勘定奉行小栗上総介御用取次竹本隼人正は其魁なりといふ」と、天皇も大名も廃した將軍による郡県制の企てを非難していることは看過できない。幕府内部でこうした議論が真剣になされていたかは疑問であるが、そもそもこうした巷説が家茂の侍読によつて、実しやかに語られており、幕閣内に様々な意見が存在し、かつ対立も惹起していることが窺われる。^⑥なお、「皆其説ニ而夷人と親密と事を取計ひ候由、夫故今度小笠原世子永井主水正夷人へ応接之処、二閣老等之姦謀相顯れ、夫今此一大変事を謀候と評判仕候」と、小笠原長行および永井尚志の登用によつて、二閣老の姦計が暴露されたことが契機となり、將軍辞職という前代未聞の珍事となったとの巷説も伝えている。

この將軍辞意に対し、近衛忠房・正親町三条実愛は東帰を認めるべきであると主張したものの、二条閑白・朝彦親王は反対し、結局朝廷は三日に請願を拒否し、二条閑白は家茂の東帰を停め、一〇月四日に自ら参内して事由を奏聞せよと松平容保を通じて命じた。慶喜・容保・定敬は伏見において家茂を説得、それに応じた家茂は二条城に入った。同日、朝彦親王・晃親王・二条閑白・徳大寺公純・近衛忠房・一条実良・九条道孝・六条有容・野宮定功・慶喜・容保・定敬・小笠原らが参内して朝議が開かれた。

慶喜らは外交交渉の切迫の情態を分疏し、兵庫先期開港は

差し置き、条約勅許をひたすら懇願した。これに対し、近衛忠房は「朝議之處諸侯御召之上、公議ヲ以不朽之處置被召付度、依而来て迄之時日遷延之応接いたし候様御論判相成候⁹⁷⁾」と、薩摩藩の主張に沿って諸侯会議を提唱して四国側に期限延長を求める、二条閑白も「戊午年以来、神宮御初御誓願之儀且人心不居合連も難被有許之事⁹⁸⁾」と勅許は不可である旨、議論に及んだ。しかし、慶喜は「中々左様之応接いたし候而も承伏いたし夷情ニ無之、則兵端ヲ開候ニ相違無之候間、兎角御許容相成外有之ましく⁹⁹⁾」と、また小笠原は「兵端ヲ開候得は、忽ち皇国焦土と相成、不可謂之御至難相迫候¹⁰⁰⁾」と反駁したため、形勢は勅許止む無しに傾きつつあった。

そこで、忠房は藤井良節・井上大和を非蔵人口まで招き寄せ、「次第二而不及御微力候付、薩藩より応接之處御請合ニ而言上之意有之間敷哉」と、薩摩藩の意向を確認する依頼があったため、藩要路を既定の方針に従い次の回答を認め、井上に持参させた。

兵庫開港三港勅許之儀不容易皇国之御重事ニ而、輕卒ニ御許容相成候而は、天下之人心不居合皇威相廢候御場合付、有名之侯伯御召之上、天下之公議ヲ以御評決相成、右来会迄時日遷延之為応接朝廷より可然御方様御差向相成、薩藩江随従被仰付候ハ、尽死力十分差はまり十二

八九ハ遂成功度奉存候事

これによると、条約勅許・兵庫開港を勅許するか否かは、容易ならざる皇国の一大事であり、軽率に決定があつては、人心は収まらずに皇威は廢れてしまうため、有力諸侯を招集して公論によつて決定すべきであると、あくまでも諸侯招集に固執する。そして、諸侯の上京までの時間稼ぎとして、外国艦隊へ朝廷から相応の使者を派遣すべきであり、その際には薩摩藩士に随従を申し付けていただければ、死力を尽くして十中八九は成功をするであろうとの見解を示した。

なお、こうした忠房の行為は朝彦親王の知るところであり、「可被為許之書取、内府（忠房）勸書、尤今曉来薩人非蔵口へ四五人内府分招置候由、右邊ニ而打合宜旨返答ニ仍而先治定誠ニ不立朝憲義深恐々入候事¹⁰¹⁾」と、薩摩藩士を呼び寄せて談合するなど朝威を軽んじていると、厳しくその姿勢を批判している。朝彦親王は諸侯招集を九月二十九日段階から断固反対しており、これによる朝廷の動揺を措定して害が大きく益が少ないと主張した。また、忠房は孝明天皇に決断を迫り、「早々御返答被仰出候様、押願候」旨を言上し、御前から引き下がらず、「不敬」であると非難している。

薩摩藩からの建言を受けて朝議があり、その建言を容れて、既に鎖港攘夷を断然決行し、皇威の伸張を計るべきことを奏請していた大原重徳を派遣することに内定し、薩摩藩か

らは岩下方平・大久保一蔵を随従させることに決した。大原については、九月二六日段階で議奏加勢・国事御用掛への任命を内願しており、二九日に却下されていた。恐らく、この朝議には武臣は参加していなかったのだろう。大久保は忠房の指示に従い、大原に対面して概略説明したところ、至極決心の様子で「只今殿下より御内達拝承いたし、第一貴藩より建言之由候間万端御頼被成候」と前向きな姿勢を示した。

しかし、慶喜はこれに反対して容保と連署し、その不可なることを武家伝奏に認め、勅許が国家の存亡に関わると切言し、また、容保は小笠原と共に朝彦親王に談判し、大原派遣を断固として阻止しようとした。大久保は忠房から勅許は阻止できないと聞き及び、「此上は諸侯御召、且兵庫開港之処、御動き無之処、第一二可有御座段」と、兵庫開港は諸侯会議で決定することを強く申し入れて退散した。大原も慶喜と激しい激論となり、大原が「終二箇様之大事件前以及言上候ハ、諸藩御召ニも相成、篤と可被尽衆議候処、昨夜二相成申出則御決答被下度と申義難心得段」、詰問に及んだところ、慶喜は、「是ハ私一人之重罪ニ候間、如何様共嚴罰ヲ可蒙」と回答して、頑として応じようとはしなかった。

また、慶喜は在京の諸藩士に条約勅許・兵庫開港の可否を諮問することを提案し、それに決したため、翌一〇月五日、会津藩士外島機兵衛・大野英馬・広沢安任、桑名藩士岡本作

之衛門、鳥取藩士安清風、岡山藩士花房義質、肥後藩士神山源左衛門・上田久兵衛、薩摩藩士内田政風、土佐藩士津田斧太郎、久留米藩士久徳与十郎、柳河藩士宮川登三郎、佐賀藩士長森伝次郎、福岡藩士東郷吉作、津藩士戸波明太郎、越前藩士森賢次郎、芸州藩士熊谷兵衛、加賀藩士里見亥三郎等を召し、二条関白以下、正親町三条実愛・野宮定功・慶喜・容保・定敬・小笠原等が臨席して意見を聴取した。

上田久兵衛・外島機兵衛・津田斧太郎・久徳与十郎らは条約勅許・兵庫開港不可に賛成し、花房義質は反対を表明し、内田政風は諸侯招集という薩摩藩の持論を展開した。一会桑勢力は、概ね諸藩においても条約勅許に異議がなかったとして、速やかなる勅裁を強く求めるに至った。しかし、その後の朝議においても、なお容易に決定を見なかったため、一会桑および小笠原は「無謀二千戈ヲ動シ候得ハ必勝之利無覚束、仮令一時ハ勝算有之候共西洋萬国ヲ敵ニ引受候時ハ幕府之存亡ハ姑ク差置、終二ハ実祚之御安危ニモ拘リ萬民塗炭之苦ヲ受可申実以不容易儀」と外国勢力に勝てるはずもなく、幕府の滅亡のみならず、国家存亡の危機であると迫った。

そして、「陛下萬民ヲ覆育被遊候御仁徳ニモ相戻り、仮ニモ治安民之任ヲ荷候職務ニ於テ如何様御沙汰御座候共施行仕候儀、何分ニモ難忍奉候間右之処、篤ト思召被為分早々勅許被成下候様仕度」と、孝明天皇を脅すような言葉すら並

べ、繰り返し速やかなる勅許を断固として求めた。ここに至り、同日夜に入つて叡断があり、兵庫開港は不可としたものの条約は勅許となつた。安政五年（一八五八）の通商条約調印以来、我が国を未曾有の内乱状態に陥れた条約勅許問題は七年の時間を費やして、ようやく決着に至つた。

なお、通商条約は勅許されたものの、兵庫開港は先期開港どころか拒否されたため、幕府はその後の対応に苦慮する事態に至つた。幕府はフランス公使ロッシュと計り、兵庫は期日通りに開港し、事情が許せば先期開港すること、兵庫の即時開港不可の代償として、償金は予定通りに支払い、税率改正の協議を開始するとの覚書を外国代表に示して、何とか大坂湾から外国艦隊の退帆を実現した。しかし、兵庫開港問題はこれ以降、国家レベルの懸案事項であり続け、幕府と薩摩藩との関係に楔を打ち込むことになる。

一方で、この間の混乱で老中阿部正外・松前崇広は失脚して幕閣体制は一新され、一〇月九日、老中格小笠原長行を老中とし、側衆竹本正明を罷免して、御用取次見習朝倉俊徳を側衆とした。翌二〇日に將軍家茂は慶喜に政務輔翼を命じて、慶喜の官位の昇進を奏請したため、朝廷は慶喜を従二位権大納言とし、政務輔翼中は御車寄から昇降することを許可し、特に摂海防備を嚴重にすることを命じた。更に、二二日には備中松山藩主板倉勝静を老中とし、二四日、板倉に大將

軍進発扈從および進発御用取扱を、小笠原に進発中勝手御用取扱を命じて板倉・小笠原体制を確立し、一会桑勢力と協調しながら長州再征問題にあたつた。

朝幕間は家茂の辞表提出後、その撤回はあつたものの円滑さを欠いており、特に家茂の参内によつて朝幕関係の盤石さを示す必要があつた。一〇月二七日に至り、ようやく家茂は一会桑勢力・老中本莊宗秀等を従へて参内し、天顔を拝してこの間の寵命を謝した。これに対し、朝廷は庶政を一新し、武備を整備して外侮を受けないように計らうことを命じた。ここに改めて大政委任が確認され、朝幕の融和関係はかううじて弥縫され、第二次長州征伐へと突き進むことになる。なお、一月一五日に大老酒井忠績が、一七日には若年寄酒井忠毗が罷免されており、江戸での幕閣刷新も加速していた。

なおこの間、朝幕間にあつて最も効果的だったのが上田久兵衛による周旋であつた。一〇月一〇日以降、將軍参内までの間に八回も大坂城に登城するなど、閣老や一会桑勢力から密に相談を持ちかけられ、かつ二条閑白や朝彦親王、六条有容にも入説するなど、朝幕融和や長州再征の決定に容喙し続けており、上田の政治力は当時別格のものであつた。しかし、余りに朝幕双方の要路から信頼を勝ち得過ぎ、異例の待遇を受けたことから、熊本ではその偏った政治スタンスに杞憂の念が惹起した。その結果、一二月九日に上田は藩地への

召還命令を受けるに至った。¹⁰⁾ 上田の脱落は朝幕双方にとつて、甚大なダメージを齎した。

条約勅許という状況に危機感を持った親薩摩藩の廷臣は、久光の上京に期待をかけた。近衛忠房は久光・茂久父子に書簡（一〇月七日）¹¹⁾を発し、条約勅許の事情を報じて、「今度列藩被召寄候二付、早々応召御上京之程祈入待入候事、誠に不容易拘国体時勢、迅速御上京可然候事」と述べ、久光の至急の上京を勧説した。一方で、「今度諸藩召之儀、大樹江被仰出候へ共、大樹より夫々相達申候坎、不達坎不分明二付申入候事存候、何分幕之大罪難通候也」と、諸侯招集が將軍家より諸侯に伝えられるかは不分明であるとし、幕府の態度を非難した。こうして、諸侯召命問題は長州再征に向けた動向の中で、いつの間にかうやむやになってしまった。本件が蒸し返されるのは、約一年後の家茂逝去後の次期將軍問題にまで先送りとなった。

おわりに

元治元年八月以降、長州征伐後の幕府の矛先が薩摩藩に向かうことへの警戒心から、薩摩藩・島津久光は藩地に割拠して、貿易の振興や軍事改革・武備充実による富国強兵を目指し始めており、幕府から距離を置いて将来の戦闘に備えると

いう「抗幕」志向を明確にしていた。一方で、武力を伴わない外交権の移行による事実上の幕府打倒、つまり幕府を廃する「廃幕」を企図していた。こうした薩摩藩の方針は、これ以降の藩是として国事周旋の基本とされた。

慶応元年初頭においては、毛利父子・五卿の東行および参勤交代・諸侯妻子在府の復旧阻止は、藩は実現のために何としても阻止しなければならない事象であった。特に長州藩処分決定については、諸侯会議を開催し衆議によることを画策しており、抗幕志向の戦略として西国諸藩連合を提唱していたが、その実現に向けた具体的な方策であった。征長総督慶勝と一橋慶喜の同意を得たものの、松平容保や肥後藩京都留守居役・上田久兵衛らの巻き返しにあつて実現には至らなかった。

薩摩藩の周旋方法として、主として小松帯刀・大久保一蔵による関白二条斉敬・朝彦親王・近衛忠房への執拗な入説が実行された。その結果、三月二日御沙汰書に結実したが、そこには薩摩藩が目論んだ参勤交代・諸侯妻子在府の復旧および毛利父子・五卿の東行中止が謳われ、將軍家の上京も強く催促されおり、周旋活動は成功したかに見えた。しかし、御沙汰書の直接降下を阻止する過程で一會桑勢力は急速に結びつきを強め、朝議での審議事項について、予め一會桑勢力に打診するという政治体制が構築されることに帰結した。

参勤交代復旧等の中止が実現し、一方で福岡藩と連携した五卿の復権と朝威の回復が頓挫したことも相俟って、元治元年秋以降の既定路線であった小松・大久保・西郷の帰藩が実現し、海軍の振興を柱とする藩政改革が優先された。こうした中で、五月一六日、将軍家茂は進発を開始したが、三月二日御沙汰書の内容を巧みに無視する状況を作り上げ、朝廷から指示された上京ではなく、自らの意思による長州再征のための上坂と規定された。しかし、進発はしたものの、当初から武力発動に消極的であったことは否めず、幕府権威の更なる失墜を招来する結果となった。

将軍家進発の事態に対し、情勢探索と長州再征を阻止するため、大久保が上京して朝彦親王・近衛忠房・正親町三条実愛に長州藩処分は将軍が在京の上、衆議に諮って決定し、征討は軽々に踏み切るべきではないことを勅書で命じることを入説した。しかし、その効果は薄く、薩摩藩にとって周旋はかえって害となると判断が下され、活動は中止を余儀なくされた。一方で、期待した長州藩の服罪使は現れず、幕府軍は徒に滞坂を続けるのみで手詰りの状況に陥った。

九月一六日、現状を朝廷の権威によって何とか打破しようとし、将軍家茂は再征勅許の奏請のため上京した。これに對し、大久保は晃親王らに勅許阻止に向けての周旋を行い、諸侯会議での衆議によって、長州藩処分の内容を決定すること

を入説した。そこに英・仏・蘭・米の四国連合艦隊が大坂湾に闖入したが、これを好機と捉えた大久保は朝彦親王・二条閑白への劇烈な談判に及んだが、慶喜の政治力の前に屈して勅許となった。この過程で、大久保は朝彦親王に対して「非義勅命ハ勅命ニ有らず」、諸藩は奉じないとかまで切言し、また、西郷はこの事実を長州藩に齎すことで薩長融和に利用した。

四国代表が早期開市・開港、通商条約の勅許などを求める中、九月二四日、在京の西郷・大久保・吉井友実は西国雄藩の諸侯を京都に会同し、これによって長州再征を阻止し、合わせて条約勅許問題の解決を図ることを議し、久光・松平春嶽・伊達宗城の上京を促した。西郷から外国艦隊の大坂湾闖入の一報を受けた久光は、自らの上京を即断しており、この事態を逆手にとって、諸侯会議の実現、そして外交権を幕府から朝廷に移管することを企図した。しかし、条約勅許の一報が届いたことなどから、久光の出京を中止し、その代わりに小松・西郷が一〇月一五日に率兵上京した。また、春嶽・宗城も時期尚早を唱えるなど、応じることはなかった。

条約勅許について、当初から朝幕間、そして幕府本体と一会桑勢力間で意思の疎通を著しく欠いて甚大な混乱を招き、将軍家茂の辞職・朝廷による老中罷免に発展した。家茂の辞意の撤回に成功した一会桑勢力は、慶喜を中心に条約勅許を

迫ったため、形勢は勅許止む無しに傾きつつあった。しかし、ここから近衛忠房を擁立する薩摩藩の巻き返しがあり、諸侯会議の招集の上、衆議によって決定する、それまでの時間稼ぎのために使者を派遣するという建言を容れて、大原重徳を指名して談判することに内定し、護衛として薩摩藩からは岩下方平・大久保を随従させることに決した。しかし、慶喜はこれに反対して容保と連署し、その不可なることを武家伝奏に認め、勅許が国家の存亡に関わると迫るなど猛烈な巻き返しを図り、遂に条約は勅許となった。しかし、兵庫開港は拒否されたため、幕府はその後の対応に苦慮する事態に至った。

なお、こうした薩摩藩の過激な動向は朝廷や幕府の嫌疑はもちろんのこと、薩摩藩の思惑を遥かに超えて英国を始めとする外国勢力からも疑惑の目を向けられることになり、これ以降の大きな難問に発展する。また、中央政局では薩摩藩が長州藩のみならず、外国（英国）と結びついているとの嫌疑が公然と語られており、既にこの段階で薩長融和が前提とされ、しかも、諸藩においてもそのことが半ば事実として喧伝されていた。

本稿では、長州藩処分の決定に関わる諸侯会議について、朝威を背景にした衆議という大義名分の下、西国諸藩連合を結成し、幕府に対峙して国政への容喙を実現する方策であ

り、抗幕戦略の要である朝廷権威の向上、幕府権威の失墜を一気に図る薩摩藩の戦略として位置付け、慶勝・慶喜を取り込むこと、特に慶喜については幕府本体と対峙するために担ぎ上げる適任者と判断し、小松が接近して江戸幕閣との離反を画策したことを論じた。また、三月二日御沙汰書について、小松・大久保の二条閼白や朝彦親王への入説状況および交付過程を明らかにし、その交付にこだわる余り、結果として薩摩藩は慶喜の取り込みを果たせなかったことを明示した。

また、長州再征・通商条約の勅許に至る過程において、薩摩藩の抗幕姿勢がより鮮明となり、近衛忠房・正親町三条実愛と結んで長州再征の勅許反対、条約勅許を巡る衆議のための諸侯召命の周旋を猛烈に実行したため、二条閼白や中川宮の不興を買い、さらに一会桑勢力からも甚大な嫌疑をかけられることとなった経緯を明らかにした。加えて、薩摩藩との同調を求めて越前・宇和島に使者を派遣したため、両藩はかつて幕閣から嫌疑を受けることになり、これ以降、薩摩藩と表立っての連携は回避するようになったこと、また、英国からは条約勅許そのものを反対していると捉えられ、嫌疑を受ける結果となったことを論証した。

なお、長州再征の勅許を巡り、大久保の周旋は苛烈を極め、二条閼白・朝彦親王を辟易とさせて、大久保の存在感を

一気に高めたこと、「非義勅命ハ勅命ニ有らず」の発言が既に薩摩藩論として、西郷からも発信されており、しかも廷臣間で喧伝され、朝廷においても、その発言の影響力は相当なレベルにあったことを指摘した。

薩摩藩は中央政局において、毛利父子・五卿の東行および参勤交代・諸侯妻子在府の復旧阻止、長州再征の勅許反対、条約勅許を巡る諸侯召命の周旋活動を、苛烈を極める廷臣への入説を伴って推進したため、朝幕双方から強い嫌疑を受けることになり、朝幕のみならず、諸藩からも薩長融和路線に突き進んでいると認識されるに至った。薩摩藩の中央政局における舵取りは、四面楚歌の中で慎重にならざるを得ない事態となったが、一方で、具体的な長州藩との連携が模索され始め、軍需品購入時の名義貸しなどを通じて、その動きは一気に加速することになる。

註

- (1) 拙稿「第一次長州征伐における薩摩藩―西郷吉之助の動向を中心に―」(『神田外語大学日本研究所紀要』第8号、二〇一六年)、一〇二九頁参照
- (2) 元治元年八月二二日、幕府は長州藩主毛利慶親・世子定広の官位および大將軍の偏諱称号を褫奪したため、

一月四日、慶親は敬親、定広は広封と改名した。本稿では煩雑を避けるため、表記はすべて敬親、広封で統一した。

- (3) 佐々木克『幕末政治と薩摩藩』(吉川弘文館、二〇〇四年)、久住真也『長州戦争と徳川将軍』(岩田書院、二〇〇五年)、家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の政局』(ミネルヴァ書房、二〇一一年) 他

- (4) 「万石以上之面々江戸在住復旧達書」(鹿児島県維新史料編さん所『鹿児島県史料(忠義公史料)』(以下『忠義』)、鹿児島県、昭和五一年) 三、史料番号四二六、五〇八―五〇九頁) によると、以下の通り沙汰している。

一万石以上之面々交代寄合、嫡子在国在邑且妻子国邑へ引取候共、可為勝手次第旨、去々戌年仰出候、銘々国邑へ引取候面々モ有之候処、此度御進発可被遊候二付テハ、深キ思食モ被為在候付、前々ノ通相心得、当地へ呼寄候様可致候、

一万石以上之面々交代寄合、参勤之割御猶予被成下候旨、去々戌年被仰出候所、深キ思召被為在候二付、前々之通御定之割合相心得参勤交代可有之候、

- (5) 老中達(元治二年一月二五日、東京大学史料編纂所「維新史料綱要データベース」)
- (6) 「子之十二月薩州ヨリ岩国へ使節口上写」(『忠義』

三、史料番号五二八ノ一、六二五ノ六二六頁)

(7) 島津久光書簡(水野忠精宛、一月二五日、鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料(玉里島津家史料)』(以下『玉里』)四、鹿児島県、平成七年、史料番号一二六八、四七頁)

(8) 「久光ヨリ幕府ヘノ建言」(一月、『玉里』四、史料番号一二七〇、五〇ノ五二頁)

(9) 日本史籍協会叢書『續再夢紀事』(以下、『再夢』)四、東京大学出版会、昭和四十九年復刻、二六頁。なお、以降特に断りがない場合、正統日本史籍協会叢書とする。

(10) 久住真也『長州戦争と徳川将軍』、一五五ノ一五六頁

(11) 宮地正人編『幕末京都の政局と朝廷』、二〇〇二年、名著刊行会、二四三頁

(12) 『再夢』四、二七頁

(13) 小松帯刀書簡(大久保一藏宛、一二月一三日、立教大学日本史研究室編『大久保利通関係文書』(以下、『大久保』)三、マツノ書店、二〇〇八年復刻版、二一一ノ二二三頁)。これに関連し、「当月今正月に掛而は橋公迎之处、何と坎申場に至り候段内心心得之為しらせ候趣、柴田(東五郎)、新納嘉藤次方に参り咄いたし候段申越候、若左様之節ハ薩橋公江組し候へハ則天下両立に相成

候間其辺相含候様申居候よし、定て奸吏之手先且は此方之情実為承に手数いたし候事と被察申候、若外心有之事ならハ近日相分候事と存申候、橋公と幕との争二何そ此方分関係之筋二も無之面白き事二御坐候、衰運之初に御坐候」と、幕府が薩摩藩と慶喜の合体を恐れていることが窺える。なお、「松前様ハ長州征伐と名は御座候得共專一橋江嫌疑有之風聞二御座候、一橋、会津所司代関東之間得不宜兵勢を張右等を退ケ可申哉之説も有之候得共、当分之微力二而ハ迎も果断之所置手着ハ出来申ましく寔ニ無理成奸察ニ御座候」(大久保一藏宛内田正風書簡、一二月一三日、『大久保』二、七〇ノ七二頁)と、一會桑勢力全体に対して嫌疑があるとしながらも、東下は叶わないと推察している。

(14) 内田正風書簡(大久保一藏宛、一二月一三日、『大久保』二、七〇ノ七二頁)。なお、内田は「関東自滅之姿穩成申候、只今関東江一橋御帰之策弥相立候得ハ実ニ不容易形勢打重り可申ハ案中ニ御座候」と慶喜の東下に反対し、それを求める幕府の自滅を想定している。

(15) 一橋慶喜書簡(松平春嶽宛、二月一日、『再夢』四、三七ノ三八頁)によると、「僕之心底聊他意なく、京師守護之任相尽、近畿を安し候迄之事ニ候处、右出張ニ付、彼是と流言差起候向は、大津対陣中より既ニ承り

申候間、進退之間訳而心を附居候得共、兎角意外之説のみ被行、近畿之人心疑惑を懷居候ニハ、扨々相困り申候」と、大津対陣中も嫌疑に辟易している様子が窺える。

(16) 小松帶刀書簡(大久保一藏宛、十一月二六日、『大久保』三、二〇六―二〇八頁)

(17) 吉井友実書簡(大久保一藏宛、元治元年二月二七日、『玉里』三、平成六年、史料番号一二三八、七五―七五二頁)

(18) 上田久兵衛書簡(父宛、元治元年二月一〇日、『幕末京都の政局と朝廷』、八五―九〇頁)

(19) 『朝彦親王日記』(以下、『朝彦』) 一(一月二四日条、昭和四四年復刻、一一六頁)。なお、一月二九日条(一二四頁)には倉沢右兵衛が二条閑白に対し、「諸藩被召候而防長儀計トハ不相成、天下之儀彼は議論相立御為ニ不成、仍大樹早々上京被為仕且幕ノ姦吏為退度、左様無之而ハ大樹ノ職掌難相立シハラク之所、諸藩召御延引願之由也」と懇請している。

(20) 『朝彦日記』一(一五二頁)によると、その面談内容は「参勤旧例之通幕分被申出如何故武備充実候迄是迄通ニ禁中以御英断幕へ被仰出候様内願之旨申候、仍而朝彦分猶明日内府公面会之上内府分何トカ返答可有之申答候

也、家内関東江引越ノ義同段申越候事」であった。

(21) 晃親王書簡(島津久光宛、二月一七日、『玉里』四、史料番号一二八九、八〇―八二頁)

(22) 島津久光書簡(晃親王宛、日付未詳(三月上旬と比定)、『玉里』四、史料番号一二八〇ノ三、六七―六八頁)

(23) 大久保一藏書簡(蓑田伝兵衛・西郷吉之助宛、二月二四日、『玉里』四、史料番号一二九三、六七―六八頁)

(24) 『朝彦日記』一、二月二五・二七―二九日、三月一日条、一七八―一七九・一八二・一八三―一八四・一八六―一八八頁

(25) 「將軍上洛、参勤制ヲ文久二年ノ令ニ復スヘキ御沙汰」(『玉里』四、史料番号一三一、一二四頁)

(26) 大久保一藏書簡(蓑田伝兵衛・西郷吉之助宛、三月六日、『忠義』三、史料番号六二七、七一―七一九頁)

(27) 『朝彦日記』一、二月五日条、一三九頁

(28) 『中山忠能日記』(以下、『中山日記』) 三(三月二九日条、昭和四十八年復刻、六七頁)によると、「尹ハ此比薩ト大振レ彼藩ハ実ニ引拂トノ沙汰甚不審ニ存候、此比薩ハ頻ニ長も服罪之上ハ早々寛大ノ御所置第一急務ト所々へ申立候由、尹ハ私身ヲ恐レテ不承知其辺分振候トノ沙汰」とあり、長州藩への対応を巡って、朝彦親王が

薩摩藩を忌避していると記している。

- (29) 『朝彦日記』一、三月二〇～二一・二六日条、二二一～二二五頁

(30) 岩下方平書簡(大久保一藏・西郷吉之助宛、四月三〇日、西郷隆盛全集編集委員会『西郷隆盛全集』(以下、『西郷』)五、大和書房、昭和五二年、一二八～一三二頁)によると、「尹宮意に叶わざる、山階宮・内府公・正親町三条・大原・裏辻等を退けんと謀り玉うと云々、此の御方々薩ひいきと称せらる」とあり、朝廷内では見親王・近衛忠房・正親町三条実愛・大原重徳・裏辻公愛が親薩摩藩の廷臣とされている。

- (31) 註(26) 参照

(32) 大久保一藏書簡(蓑田伝兵衛宛、三月一五日、『忠義』三、史料番号六二九、七一四～七一五頁)

(33) 『大久保利通日記』上巻(二月一日条)、マツノ書店、平成一九年復刻、二四二頁

(34) 「幕命拒絶の薩摩藩上書控」(三月頃、『西郷』二、三一～三二頁)

(35) 吉井友実書簡(蓑田伝兵衛・西郷吉之助宛、二月二日、『玉里』四、史料番号二二八三、七〇～七二頁)

(36) 『新訂黒田家譜』第六巻(上)(従二位黒田長薄公伝(上)、文献出版、昭和五八年、五五一～五五二頁)

(37) 西郷吉之助書簡(黒田清綱宛、五月二六日、『西郷』二、四二～四三頁)によると、「筑・米の両藩は力を尽し候得ば、其の益必ずこれあるべき事にて、片腕には相成る藩に御座候」として、西郷は福岡藩とともに久留米藩に対しても、大きな期待を寄せている。

- (38) 註(36) 参照

(39) 「早川養敬手記」(三月二五日条、『大日本維新史料稿本マイクロ版集成』)

(40) 『七卿西竄始末』五、野史台維新史料叢書二一、昭和四五年復刻、二五三頁

(41) 西郷吉之助書簡(月形洗蔵宛、四月二五日、『西郷』二、四〇～四二頁)

(42) 『吉川経幹周旋記』三(東京大学出版会、昭和四五年復刻、八一頁)によると、高崎五六は岩国藩士大草終吉に対し、二二日に立出し、四〇日間、鹿児島に滞在した後、上京する見通しを述べている。

(43) 「嵯峨実愛備忘」(四月一九日条、『大日本維新史料稿本マイクロ版集成』)

(44) 『中山日記』三(五月三日条、九五頁)。なお、十日条(一〇〇頁)にも「小松帯刀近々多数引連再上トノコト、併同藩此比追々帰国の者も有之由何歟頓と不分候」とある。

(45) 『中山日記』三、三月一日、四月二二・二五日、五月一・六日条、五二・八〇、八一・八三・九二・九七、七八頁

(46) 新納嘉藤二書簡(大久保一藏宛、八月二七日、『大久保』五、三五～三七頁)

(47) 「国事文書寫(閏五月廿二日將軍言上書)」(宮内省先帝御事蹟取調掛編『孝明天皇紀』(以下『孝明』)五、平安神宮、昭和四四年、五六七頁)

(48) 石井良助校訂『徳川禁令考』前集第二、創文社、一九五九年、一一八頁

(49) 「不容易企有之」について、七月九日、幕府は米国代理公使ポートマンに対し、上海における長州藩の蒸気船の密売に関する取調書を送付し、これを本国政府に報告して、その船を購入した米国商人およびその関係者を処罰することを要求した。その船とは、下関事件で撃沈された壬戌丸のことで、長州藩はそれを引き揚げ、慶応元年二月には大村益次郎を上海に派遣し、壬戌丸の売却とその利益による銃器購入を命じていた。

(50) 「朝彦親王御記」(『孝明』五、五六二頁)

(51) 大久保一藏書簡(五月二日、伊地知壯之丞宛、『大久保利通文書』一、昭和四二復刻、二七五～二七七頁)

(52) 西郷吉之助書簡(小松帶刀宛、五月五日、『西郷』

二、五〇～五一頁)

(53) 『維新史』四(三九八頁)等では、大久保の入説を受けて、その旨朝議決定したとするが、管見の限り、この間に朝議で議せられた形跡は見られない(『大久保利通傳』では、朝議開催を一七日としているが、その日は非開催であつた)。正親町三条実愛は將軍参内前日(閏五月二一日)の大久保の訪問には居留守をしており、大久保の意向に添えていないことを窺わせる。

(54) 大久保一藏書簡(小松帶刀宛、閏五月二七日、『大久保利通文書』一、二七八～二八三頁)

(55) 岩下方平書簡(大久保一藏・西郷吉之助宛、四月三〇日、『大久保』二、一〇～一八頁)

(56) 小松帶刀書簡(大久保一藏宛、閏五月一五日、『大久保』三、二一六～二二七頁)

(57) 上田久兵衛書簡(藩庁宛、八月一五日、『幕末京都の政局と朝廷』、一五一～一五二頁)

(58) 西郷吉之助書簡(大久保一藏宛、六月一日、『西郷』二、五二～五三頁)

(59) 大久保一藏書簡(小松帶刀宛、七月一九日、鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料(大久保利通史料)』一、鹿児島県、昭和六三年、四九～五〇頁)

(60) 大久保一藏書簡(新納久脩・町田久成宛、八月四日、

『鹿児島史料（大久保利通史料）』一、九〇一三頁）。なお、大久保は鹿児島在、新納らはロンドン在であった。

(61) 西郷吉之助書簡（大久保一蔵・蓑田伝兵衛宛、八月二三日、『西郷』二、五四～五九頁）

(62) 『中山日記』三（八月二四日条、一九七頁）による

と、平戸藩士安藤庄兵衛の話として、「薩人帰国ハ公武共攘夷ハ無音相成只種々嫌疑意外^{マヤ}遠等ニ掛り候間、陣ヲ引公武御模替ノ節ノ様子ニテ可再出哉トノ内評哉ノ由」と、薩摩藩兵の帰藩は嫌疑によるものと記している。

(63) 西郷吉之助書簡（大久保一蔵・蓑田伝兵衛宛、八月二八日、『西郷』二、六九～七二頁）

(64) 『嵯峨実愛日記』一、八月九日条、昭和四七年復刻、二八九頁

(65) 『朝彦日記』一（八月七日条、三六一頁）によると、「只苦心いたし候者、御讓位御沙汰今ニ恐入候へ共難忘、若閑白等同座ニ而伺候へ者実ニ六ヶ敷次第ト存候、苦痛除り過日来之下痢今ニ止兼」とある。

(66) 『朝彦日記』一、七月二日、八月三・四・二七日条、三四四・三五八・三七八～三七九頁

(67) 『中山日記』三、六月八日条、一三四頁

(68) 秋月種樹書簡（松平春嶽宛、一〇月一日、『再夢』

四、三五六～三五八頁）

(69) 『中山日記』三、八月二四日条、一九六頁

(70) 伊達宗城書簡（松平春嶽宛、六月一日・八月一日、『再夢』四、二二一～二二四、二二一～二二四頁）

(71) 晃親王書簡（島津久光宛、九月八日、『玉里』四、史料番号一三八五、三五一～三五五頁）

(72) 大久保一蔵書簡（九月一日、西郷吉之助・吉井友実宛、『大久保利通文書』一、三〇三～三〇四頁）

(73) 大久保一蔵書簡（九月三日、西郷吉之助宛、『大久保利通文書』一、三〇七～三二一）

(74) 勅命の拒否については、元治元年（一八六四）七月八日、老中稲葉正邦を経由したものではあったが、出兵の勅命に対し薩摩藩が拒否している前例がある。小松・西郷は「至当の御所置を以て、朝廷より御達の筋奉ぜず候わでは、違勅の名を蒙り候義に御座候得ば、決して説得致すべき筋もこれなく、別に余論これなく候間、御断りに及ぶべしとの事にて、一向打ち合わせ申さず」と、至当でない勅命は偽勅であると鹿児島に申し送っている。詳細は拙稿「元治元年の中央政局と薩摩藩―禁門の変に至る道程―」（『神田外語大学紀要』第二七号、二〇一五年、一～二三頁）参照。

(75) 『再夢』四、二八九～二九〇頁

(76) 註(73) 参照

(77) 『朝彦日記』一、九月二日条、四〇九〜四一〇頁

(78) 註(73) 参照

(79) 「風聞書」(『中山忠能履歷資料』七、昭和四九年復刻、一二三頁)

(80) 西郷吉之助書簡(大久保一藏、九月一七日、『西郷』二、七三〜七五頁)

(81) 「上国ヨリ宇和島江到来之書付」(九月二九日、『玉里』四、史料番号一三一五、一七六〜一八〇頁)

(82) 内田正風書簡(在藩側役衆宛、一〇月六日、『玉里』四、史料番号一三九五、三七九〜三八二頁)

(83) 『連城紀聞』二、昭和四九年復刻、一五九〜一六〇頁

(84) 永田蘇武之助上達(一〇月一日、『贈従一位池田慶徳公御伝記』三、鳥取県立博物館、昭和六三年、四〇八〜四〇九頁)

(85) 養田伝兵衛書簡(大久保一藏宛、九月二九日、『大久保』五、三〇二頁)

(86) 『再夢』四、二八四頁

(87) 近衛忠房書簡(松平春嶽宛、九月一九日、『再夢』四、二六六〜二六七頁)

(88) 『再夢』四、三四三〜三四四頁

(89) 松平春嶽書簡(一橋慶喜宛、一〇月三日、『再夢』

四、三〇三〜三〇四頁)

(90) 吉井友実書簡(養田伝兵衛・西郷吉之助宛、一〇月一九日、『西郷』五、一二八〜一二三頁)

(91) 伊達宗城書簡(松平春嶽宛、一〇月二四日、『再夢』四、三三二〜三三四頁)

(92) 鹿兒島県史料刊行会『小松帶刀傳 薩藩小松帶刀履歷 小松公之記事』(鹿兒島県史料集第二十一集、鹿兒島県立図書館、昭和五五年、二三頁。なお、小松はそれに先立ち、「異艦摂海江渡来之旨御達候、不容易皇国ノ御大事ニ付キ、天氣御窺且ツ非常御警衛之為可被遊御上京旨被仰出候条、此旨表方へ致通達、奥掛御勝手方へモ可相達候」(『摂海へ異船渡来云云藩令』、『忠義』三、史料番号七〇四、八一〜八一三頁)と藩官僚に達している。

(93) 『朝彦日記』一、九月二八日条、四二二頁

(94) 「薩州家来ヨリ建白(内田伸之助名)」(九月二九日付、『忠義』三、史料番号六八七、七八一〜七八二頁)によると、以下の通り。

此度兵庫表夷舶来着ノ趣意柄、詳ニ承知仕候得共、過日阿部豊後守様・松前伊豆守様御応接之上開港、且十日期限ニ被為究、右ニ付大樹家不日ニ御上洛、事件奏聞被為在候哉ニ、内々承知仕候、就テハ兵庫

表之儀帝都近、殊ニ海内ノ要港ニテ、素ヨリ勅許可

被為在候儀トハ不奉存候、墨夷初テ襲来後積年不被為在御動御儀ト、兼テ拝承仕候ニ付、乍恐聊苦心仕候儀ハ無御座候得共、自然依申立趣ニ、御動揺御許

容被為在候テハ、皇国ノ存亡未曾有ノ御永恥、千歳御取返ノ期有御座間敷、実ニ人心ノ向背ニ相拘、莫大ノ御後難此一举ト奉存候ニ付、諸侯急速御召相成、建言被聞食候上、皇威顯然相立候様有御座度奉

存候、左候テ八日間モ相掛候儀ニ付、強請申張、万一彼ヨリ輕拳ノ振舞モ候ハ、速ニ御打払被仰付度、左候ハ、弊邸当分人少ニハ御座候得共、修理大夫・

大隅守兼テ申付置候趣モ御座候間、御先鋒相勤申尽死力、聊奉報御国恩度御座候間、兼テ被聞食置被下度、此段遮テ奉願上候様重役共申付候

(95) 秋月種樹書簡(松平春嶽宛、一〇月一三日、『再夢』

四、三五六―三五八頁)

(96) 松平春嶽書簡(秋月種樹宛、一〇月一九日、『再夢』

四、三六〇―三六六頁)によると、「拙老(春嶽)考候

處、此説決而なき事にあらすと奉存候、老拙総裁在職中、是等之髣髴之議論、酒井飛騨守、小栗上総介二人申候事于今耳底ニ残り有之候」と、その巷説を肯定的に提

えている。

(97) 大久保一藏書簡(西郷吉之助・蓑田伝兵衛宛、一〇月七日、『玉里』四、史料番号一四〇〇、三九四―三九八頁)

(98) 『嵯峨実愛日記』一、一〇月四日条、二八九頁

(99) 註(97) 参照

(100) 『朝彦日記』一、一〇月四日条、四三二頁

(101) 註(97) 参照

(102) 「非藏人日記」(『孝明』五、六六五頁)

(103) 西郷吉之助書簡(蓑田伝兵衛宛、二月二六日、『西郷』二、一〇五―一〇六頁)によると、「近來細川の議論も相変わり、上田休兵衛・林新九郎の兩人は国元へ打ち下され(略)上田第一会津の手先にて御座候処、国中において議論相起こり、右の次第に及び候由に御座候」と上田の召還を伝え、「細川正義に立ち替り候わば、頓と頼る方これなきものと相成り申すべき儀に御座候」と、外様諸侯は肥後藩に倣って出兵を控えるだろうとの見通しを示した。

(104) 近衛忠房書簡(島津茂久・久光宛、一〇月七日、『玉里』四、史料番号一三九九ノ二・三、三九三頁)